810.7
612
810. 7-To12
1200500753270

ㅗ9N-87
810.7
T012

日本語教科用

ハナシコトバ學習指導書

下

908
51

目次

教科用日本語 ハナシコトバ編纂趣意……一
教科用日本語 ハナシコトバ學習指導書 下 凡例……六
第一課……十五
第二課……二十
第三課……二十五
第四課……三十四
第五課……四十
第六課……四十七
第七課……五十五
第八課……六十一
第九課……六十七
第十課……七十三
第十一課……八十二
第十二課……八十八
第十三課……九十五
第十四課……百二
第十五課……百九

第十六課……百十九
第十七課……百二十七
第十八課……百三十三
第十九課……百四十
第二十課……百四十九
第二十一課……百五十六
第二十二課……百六十六
第二十三課……百七十三
第二十四課……百八十一
第二十五課……百九十三
第二十六課……二百三

附錄

日本語教科用　ハナシコトバ編纂要旨　華語譯……一
日本語教科用　ハナシコトバ學習指導書　下　凡例　華語譯……五
日本語教科用　ハナシコトバ　下　華語譯……十一

目次終

日本語教科用

ハナシコトバ編纂趣意

一　目的

ハナシコトバは、極めて簡易で且必須な日本語の話言葉を、主として青少年男女に學習せしめる目的で編纂したものである。

日本語の學習には、口から耳へのいはゆる話言葉から入る方法と、目に訴へるいはゆる書き言葉から入る方法とがある。しかし、書き言葉を學習せしめるにしても、眞に自己のものたらしめるためには、話言葉の修得がその前提となるべきである。しかも、本書は卑近な日常語の學習が目的であるから、その意味からも、話言葉を學習せしめることとしたのである。

一　材料

本書は、基本的な語彙と構文とによつて、日常生活を表はすこととし

た。

語彙は約六百選んだが、學習指導書に於て相當數補つた。元來、語彙は、言語生活を圓滑に遂行する上には、多ければ多いほど好都合であるが、初歩の段階に於ては、學習上の制約を考慮して、この中で最も重要なものを選び、これが運用を十分ならしめることが必要である。本書に於ては、かやうな觀點から、學習者にとつて重要であると考へられるものを主として選んだのである。しかし、語彙の運用を十分ならしめるには、構文形式を與へなければならない。構文形式は、或一定の思想・感情を表現する語の結合形式である。隨つて、日本語の學習には、語彙の修得と構文形式の修得とが必然的に要求されるのであるが、構文形式の種類は雜多であり、量も少くはないから、その基本的なものを確實に修得することが、日本語に早く習熟する所以である。蓋し、構文形式に習熟してをれば、語彙は必要に應じて適宜これを補ふことができるか

らである。たゞ本書には、話言葉の實際に卽さないものもないではないが、それは易より難に入る言語訓練の過程上必要な手段として收めたのであつて、それらは學習の進むにつれて、次第に整理して日本語の醇正を期する方針を採つた。

一　組織

本書は上・中・下の三冊に分つて編纂した。その「上」に於ては、主として主語と述語とから成る程度の構文形式及びこれに補語乃至客語の加つた程度のものを聽取・理解せしめ、兼ねてこれが言表をなし得る素地を養ふことを期したのである。「中」に於ては、更に進んで、簡單な修飾語の加つた程度のもの及び「上」に於ては授けなかつた構文形式、簡單な複文等を授け、「下」に於ては「上」及び「中」で授けた構文形式を應用したものを主とし、その發展としてやゝ複雜なものを授けようとしたのである。

一　發音符號

本書は話言葉を學習せしめるための教科書であるから、發音符號によつて表記することとした。發音符號としては、(一)注音符號を用ひること、(二)萬國音聲符號を用ひること、(三)ローマ字を用ひること、(四)漢字を用ひること、(五)かなを用ひること等が考へられるが、本書の對象とする如き學習者に與へるものとしては、日本語の性質上かたかなを發音符號として整理して用ひることを最も適當と認めた。さうして、かたかなを發音符號として用ひるには、(一)が行鼻濁音、(二)無聲化母音等をも表記する方法を講ずべきであらうが、本書に於ては、學習上の便宜を考へて簡略に從ひ、これらの表記を省略した。

次に、話言葉の學習を容易ならしめるために、本書に於ては分ち書きの方法を採り、助動詞・助詞を除く各品詞はそれ〴〵他の語から離して書き、助動詞・助詞は上の語に續けて書くこととした。

なほ、かたかなを發音符號として用ひれば、學習者はこれを正字法としてのかたかなの用法と混同する虞がある。この難を避けるため、本書に於ては、印刷の字體に留意し、その區別を明らかならしめた。指導者は、適當な方法により、この區別を明確に學習者に認識せしめることに努める必要がある。

一　教授時數

本書は、約百五十時間を以て教授することを大體の目標としてゐる。しかし、實際の教授に當つては、土地の事情、學習目的・學習能力の如何等によつて、この時數に增減を施してもさしつかへない。

日本語教科用

ハナシコトバ學習指導書　下　凡例

一　ハナシコトバは、始めて日本語を學ぶ人々に、日本語を話し聽く手引をしようとして編纂した教科書である。しかも、短時間に、日常生活に必須な挨拶言葉や、極めて簡易な話言葉を修得させようとする教科書である。隨つて、指導の方法が適切でなくては、十分な效果を擧げることができない。本指導書が、編纂趣意とともに學習指導の方法に關する要點を掲げて、實際指導の一參考たらしめようとする所以である。

われ〳〵の日常の談話は、音聲を主とし、これに指示・身振・表情・動作等を意識的にまたは無意識的に交へて、思想・感情を傳達しあふのであつて、決して音聲のみから成立つてゐるものではない。隨つて、言語學習の初歩に於ては、この眞相に觸れた教材であり、指導でなくては十分な效果を收めることはできない。本書は特にこの點に留意して編纂し、

さういふ立場からの學習指導を立案した。

一　上述の立場から、學習指導の方法は、先づ身邊の事物または繪畫によつて會得させ、次には繪畫及び發音符號を用ひて備忘に供し、會得と練習を十分ならしめようとした。

一　本書に示した指導事項は、たゞその骨組に過ぎない。それ〴〵の時間に於ける指導內容として、それに血肉を與へ、それを生きた教材たらしめるために、これを如何に發展させ組織化すればよいかは、一に指導者の工夫に俟たなくてはならない。かくて指導內容が決定すれば、次にそれをどういふ順序に學習させるかといふ指導過程が立てられなくてはならない。

指導過程としては、先づその時間に於て學習させようとする教材と關係の深い既習教材の復習を行ひ、それと關聯せしめて新教材を提示し、更にこれを既習教材に結合して應用を試みさせ、學習を深く確かに

させることが肝要である。

かくて、指導内容を定め、これが指導過程を豫定した上は、更に指導方法を想定して豫定案を立てておく必要がある。この豫定案がないと、教室に於ける學習者の學習活動がよく理解せられない。

指導方法は、指導者または他の學習者の話言葉を聽取らせる「聽方」、學習者自身に話させる「話方」及び指導者と學習者とで、または學習者相互で行ふ「問答」を單位として、これを如何に組合はせるかによつて決定せられる。

(イ) 聽方　外國語修得の出發點は、その外國語の聽方にある。なるべく多く聽かせ、正しく精しく聽取らせることが要諦である。

(ロ) 話方　言葉は、受身になつて聽取するだけでは修得することはできない。自ら進んで話さうといふ能動的な立場に立つて、始めて正しく精しく聽くことができるのである。元來、話すことと聽くことと

は相卽した働きであつて、話すことによつて聽く耳があき、聽くことによつて話す口がひらくといふのがその眞相であるから、兩者は相俟つてこれを行ふ機會を與へなくてはならない。

(ハ) 問答　日常の言語生活に於ける會話は、主として聽くことと話すこととから成つてゐるものであるが、問答はこれらとやゝ趣を異にし、特殊な性質を帶びてゐる。先づその特殊性として數へられる第一は、會話が生活的・内容的であるのに比して、これは反省的・形式的であるといふことである。第二は、會話が全人的であるのに比して、これは專ら知的であるといふことである。隨つて、その方向は、問ふ者と答へる者とが對立的な立場をとり、形式的照應を以て發展するのが一般である。かくて問答は、學習指導法として、聽方・話方によつて得た言葉につき、その發音・意義の把握を確實にさせ、その應用を自在ならしめる上に大なる效果を齎すものであつて、これが適切を得ると

否とは、學習指導の死活を決する鍵であるといつても過言ではない。

なほ指導法としての問答には、日常の會話としては多少不自然なところも出て來がちであるが、それは主として內容的な不自然であつて、形式的な不自然ではない。この內容的不自然は、知識の程度と言語運用力とが一致してゐない學習者の言語訓練には、或程度まで不可避である。隨つて、できるだけ日常會話の自然さを失はないといふ注意の下に、言語訓練の本旨を逸しないことが肝要である。

一　日本語を學習させるに當つて特に肝要なのは、指導態度である。われわれが言語を修得するのは一に環境の力によるもので、父兄母姉を始め、周圍の人々の溫かい顧慮の下に、知らず識らずの間にその言語社會の一員となるのであるが、外國語を修得するのはこれと異なり、環境によるかはりに學習的努力により、指導者の指導の下に、練習に練習を重ねてやうやくその用を辨ずるに至るのである。この點に對しては、

あたかも母國語修得に於ける父兄母姉の如きいたはりの態度を持し、發音・抑揚の不備を始め、語彙選擇の不適切、語法の不正確等に至るまで、意味の通ずる限りこれを認め、かたことめいた話しぶりによつてその意圖を知り、日本語に對する親しみをもたせるとともに、これが使用の興味と勇氣とを喚起することに努め、日本語で話さうとする意欲の涵養と態度の育成に努めなくてはならない。指導者が發音・語法の正確または用語・構文の的確を期するあまり、最初から批正を嚴密に行ふ時は、學習者は興味と勇氣を失ひ、日本語學習の意欲さへ失ふに至るであらう。入門に當つては、細瑕を厭はず、その大成を將來に期することが指導上肝要である。

かくの如くして、日本語學習の興味を喚起し、大膽・自由に會話しようとする傾向を養ひ、やがて學習の進むに從ひ、用語・構文・發音・語法の批正に着手し、次第に會話の上達を期さなくてはならない。この兩樣の態

度のいづれを缺いても、またその適用に機宜を失つても、有效な日本語の學習指導は期し難いであらう。

一　本書は、學習指導の方法を、時間を單位として計畫せず、教材を單位として立案した。これは、學習の時・所・位に適切な指導たらしめるために、繁簡伸縮を圖る便に供しようとしたためにほかならない。

一　本書の組織は、敍上の趣旨に基づき、各課に關して教材・指導・備考の三項を設け、指導に於ては學習指導の要領と方法を示し、備考に於ては指導上の注意を記すこととした。

一　本書に於ても、上・中卷に於けると同樣に、かたかなを發音符號として用ひてゐるが、これは事物や繪畫と同樣、一種の教便物で、特に語彙・構文の備忘として練習に供へるためである。これが實際の指導に當つては、できるだけ眼前の事實から出發することに努め、發音符號としてのかたかなは備忘的に使用するに止むべきである。

一　本書に掲げてある問答には、教科書に於けると同じく、日常會話に於ける表現形式と多少ちがつてゐるものもあるけれども、これは全く言語訓練の必要から設けた段階である。

一　本書の各課に記した指導案は、各教材による話言葉の學習には少くもこれだけは必要であると思はれる問答を計畫的に掲げたものである。隨つて、實際の指導に當つては、その學習者の力に應じ、その場所に應じ、その時に應じて問答を加除して適切を期することが肝要である。

一　本書に掲げた補充語は、教材の提示並びに練習上必要なものに限つた。隨つて、學級の大きさ、學習者の知能の程度その他の理由により、學習者の學習能力に餘裕のある場合には、本書に示したもの以外に適當な語彙を選んで補充し、語彙數の增加を圖ることが肝要である。この際には、なるべく教材並びに環境に卽して語彙を選ぶべきである。

附　**アクセント**

本指導書の教材欄に、各教材のアクセントを附けた。その要領は次のとほりである。

(一)　アクセントとは、聲の高低・調子が各單語に慣用上固定したものをいふ。

(二)　**ホンデス　アナタ**　の如く右側に縱線を引いたものは、その部分の聲の調子が高くなることを示す。

(三)　縱線を附けない語は、語の終まで大體同じ調子で發音することを示す。

(四)　**ソーデワアリマセン**　の如く括弧を附けたのは、特にその語の意味を強めていふ時のほかは、聲の調子があまり高くならないことを示す。

(五)　同一の單語について二樣のアクセントの慣用のあるものは、その一を表記し、他を參考として備考欄に掲げた。

第一課　（第一頁）

一　教材

ヒガシノ　ソラガ　アカルク　ナリマシタ。
モー　スグ　ヒガ　デルデショー。

構文

語彙

〔教具〕　掛圖。

二　指導

(一)　要領

1　興亞精神の象徴ともいふべき旭日昇天の趣を把握させ、これを日本語によつて言表させようとするのが本課の主眼である。

2　語彙も構文も既習のもののみである。その應用として、一層これが修得を確實

にさせることが本課指導の任務である。

3　指導に於ては、眼前の事實から出發して、やがて繪畫の表現に進むのが適切有效な方法であらう。

(二)　問　答

1　復習

○いまは　なんぐゎつですか。
△○ぐゎつです。
○いまは　はるですか、なつですか。(または、「あきですか、ふゆですか。」)
△はる(なつ)です。(または、「あき(ふゆ)です。」)
○ひの　でる　はうを　なんと　いひますか。
△ひがしと　いひます。
○ひの　はいる　はうを　なんと　いひますか。
△にしと　いひます。
○こちらの　はうを　なんと　いひますか。
△みなみと　いひます。
○こちらの　はうを　なんと　いひますか。
△きたと　いひます。
○その他。
△

2　提示

○いまは　ひるですか、よるですか。
△ひるです。
○そらが　はれてゐますか、くもってゐますか。
△はれてゐます。(または、「くもってゐます。」)
○そらに　ほしが　でてゐますか。
△いゝえ、ほしは　でてゐません。

○そらに　つきが　でてゐますか。
△いゝえ、つきも　でてゐません。
○そらに　ひが　でてゐますか。
△はい、ひが　でてゐます。(または、「いゝえ、でてゐません。あめが　ふってゐます。」または、「くもってゐます。」)
○あしたは　あめが　ふるでせうか。(または、「あしたは　はれるでせうか。」)
△あしたも　あめは　ふらないでせう。(または、「あしたは　はれるでせう。」)
○掛圖または本の繪畫を見させて、これは　なんですか。(空を指して)
△そらです。
○こちらの　はうは　どちらですか。
△ひがしです。
○あさですか、ばんですか。
△あさです。
○さうです。よほど　あかるく　なってゐますね。ひが　でてゐますか。
△いゝえ、まだ　でてゐません。(一人一人に)
○もう　でるでせうか。
△もう　すぐ　でるでせう。(一人々々に)
○本の符號を見させて、

ヒガシノ　ソラガ　アカルク　ナリマシタ。

モー　スグ　ヒガ　デルデショー。

と、何遍も繰返していふ。

△ヒガシノ　ソラガ　アカルク　ナリマシタ。

モー　スグ　ヒガ　デルデショー。(發音・アクセント・抑揚等を正し、一人々々に)

○本から離れて、そらを　ごらんなさい。

はれてゐますか、くもってゐますか。
△はれてゐます。（または、「くもってゐます。」）
○あめが　ふってゐますか、　ふってゐませんか。
△（あめが）　ふってゐません。（または、「ふってゐます。」）
○あめが　ふりさうですか。
△いゝえ、ふりさうではありません。（または、「はい、ふりさうです。」）
△○その他。

3　總括

晴天ならば、次のやうな問答をする。
○ひが　でてゐますか。
△はい、でてゐます。（または、「いゝえ、でてはゐません。」）
○もう　ひが　はいるでせうか。
△いゝえ、まだ　はいらないでせう。（または、「はい、もう　すぐ　はいるでせう。」）

雨天ならば、次のやうな問答をする。
○あめが　ふってゐますか、やんでゐますか。
△ふってゐます。（または、「やんでゐます。」）
○あめは　もう　やむでせうか。
△まだ　なか〳〵　やまないでせう。（または、「もう　すぐ　やむでせう。」）

曇天ならば、次のやうな問答をする。
○そらが　はれてゐますか、くもってゐますか。
△くもってゐます。
○もう　はれるでせうか。
△もう　すぐ　はれるでせう。（または、「まだ　なか〳〵　はれないでせう。」）

△○その他。

三　備　考

(一)　語彙構文については、中の卷第九、第二十九、第三十一、第三十七、第四十八、第四十九頁等を參考する必要がある。

(二)　話題をなるべく眼前の事實に捉へ、問答の仕方をできるだけ自然の會話に近づけて、日常生活に於ける談話が日本語でできるやうに導いてゆくことに努めなくてはならない。隨つて、教科書は、さういふ課業の後、家庭の復習に役立つやうに學習させておくのが適當な取扱である。

(三)　「あかるくなりました。」といふ表現は、時間の經過に伴なふ狀態の變化であるから、わからせにくいであらうが、さういふ場合には、中の卷第四十七頁の「ヨク　ナリマシタ。」を復習したり、小石を持出して、その數を變化させて「イツツニ　ナリマシタ。」のやうに學ばせれば、よくわかるやうになるであらう。

第二課（第二頁）

一　教材

ワタクシタチワ　アサノ　ゴハンオ　タベテイマ〔ス〕。
ミンナ　ニコニコシテイマ〔ス〕。

構文

語彙　アサ　ゴハン　タベ(テイマス)　ニコニコシ(テイマス)

〔教具〕掛圖。

二　指導

(一)　要領

1　前課との關係は、時間の經過に伴なぶ生活の展開であるが、生活の展開を話題として精しく會話することは、まだ困難であるから、生活の焦點的事象を話題として、その時その場所に適切な會話指導を行ふことが本課の要領である。

2　構文は既習のものであるが、話彙には新しいものが多い。しかも、日常生活に

必要な語彙であるから、しつかり修得させることが肝要である。

3　語彙構文は眼前の事實によつて修得させ、生活の焦點的事象としての朝食に於ける一家團欒は、繪畫または掛圖によつて學習させるのが穩當である。

4　家庭團欒の樂しさを背景的氣分に含んでゐて取扱ふことが肝要である。

(二)　問答

1　復習

○ひがしの　そらを　ごらんなさい。
　はれてゐますか、くもってゐますか。
△はれてゐます。（または、「くもってゐます。」）
○いまは　なんじですか。
△○じ　○○ふ(ぷ)んです。
○あなたは　なんじに　こゝへ　きましたか。
△○じに（こゝへ）きました。
○あなたは　なんじに　こゝから　かへりますか。
△○じに（こゝから）かへります。
○その他。

2　提示

○あなたは　なんじに　おきましたか。
△（わたくしは）○じに　おきました。
○あなたは　なんじに　あさの　ごはんを　たべましたか。
（掛圖の朝食の繪畫を指して、「あさのごはん」を知らせる。）
△○じに　たべました。
○あなたは　なんじに　ばんの　ごはんを　たべますか。

△○じに　たべます。
○あなたは　なんじに　ひるの　ごはんを　たべますか。
△じふにじに　たべます。
○あなたは　いま　なにを　してゐますか。
△にっぽんごを　ならってゐます。
○わたくしたちは　いま　なにを　してゐますか。
△(わたくしたちは　いま)　にっぽんごを　ならってゐます。
○ほんの　にページを　おひらきなさい。
△本の二頁を開く。
○この　ゑを　ごらんなさい。これは　どなたですか。(畫中の父を指して)
△それは　おとうさんです。
○これは　どなたですか。(畫中の母を指して)
△それは　おかあさんです。
○以下、繪畫中の人物の一人々々につき、同様の問答を繰返す。
○みんな　なにを　してゐますか。
△あさの　ごはんを　たべてゐます。
○おとうさんは　どんな　かほを　してゐますか。
△にこ〳〵してゐます。(指導者も和して、一人々々に)
○おかあさんは　どんな　かほを　してゐますか。
△にこ〳〵してゐます。
○みんな　どんな　かほを　してゐますか。
△みんな　にこ〳〵してゐます。
○ほんの　ふがうを　ごらんなさい。

△符號を見る。
○□さん、はっきり　いってごらんなさい。
△**ワタクシタチワ　アサノ　ゴハンオ　タベテイマス。**
ミンナ　ニコニコシテイマス。(順次一人一人に)
○本から離れて、わたくしたちは　いま　なにを　してゐますか。
△にっぽんごを　ならってゐます。
○みんな　にこ〳〵してゐますか。
△はい、みんな　にこ〳〵してゐます。
○その他。
△はい、たべました。
○あなたは　ばんの　ごはんを　たべましたか。
△いゝえ、まだ　たべません。
○あなたは　ひるの　ごはんを　たべましたか。
△いゝえ、まだ　たべません。
○わたくしたちは　いま　なにを　してゐますか。
△にっぽんごを　ならってゐます。
○わたくしたちは　どんな　かほを　してゐますか。
△みんな　にこ〳〵してゐます。
○その他。

3　總括
○あなたは　あさの　ごはんを　たべましたか。

三　備考

(一)　狀態言表の指導は相當むづかしいから、

極めて的確懇切に指導することが肝要である。わけても、にこ〳〵といふやうな主觀狀態の言表は指導しにくい點があることを考慮し、指導者の表情を例示しつゝ、しかも單なる形式に墮することなく、その主觀に徹した會得を期すべきである。

(二)　この程度になれば、音や單語の正確な發音は固より、揭文全體の言表の調子を正しく自然にすることに漸次努めることが、指導上逸してはならない注意である。

第三課　（第三頁）

一　教材

タイソーガ　ハジマリマシタ。

イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ、

オトナモ　コドモモ

ゲンキ　ヨク　タイソーオ　シテイマス。

構文

語彙　**タイソー　ハジマリ(マシタ)　ロク　シチ　ハチ**

オトナ　ゲンキ

〔教具〕　掛圖（朝、老若男女が集つてラジオ體操をしてゐる繪畫）・碁石（箱または壺に入れたもの）。

二　指導

(一)

要　領

1　第一課から第五課まで、夜明・朝食・體操・登校・挨拶といふやうに、學習者の行動の推移を追うて編纂したものであるから、さういふ關聯に立つ一課であることに留意して指導すべきである。

2　爽やかな朝の潑剌たる體操の氣分を感得させ、それを日本語によつて言表させるのが大體の主眼である。

3　數詞には既に通じてゐるはずであるが、一層練習を重ねさせて、確實に修得させたい。なほ、序數詞と量數詞との區別は、事例によつて會得させたい。

4　先づ學習者身邊の事實から出發して繪畫に及び、大體修得した後に符號に進み、後日の練習に備へるのが適切な指導の順序である。

(二)

問　答

1　復習

○□さん。

△はい。

○おたちなさい。

△はい。(起立)

順次、五名を起立させる。他の學習者に向かつて、

○みなさん、たってゐる　ひとの　かずを　かぞへてごらんなさい。

△ひとり　ふたり　さんにん　よにん　ごにん、ごにん　ゐます。(指導者も和して一齊に數回繰返し、後一人々々に)

○□さん。(起立してゐる學習者の中の一人に)

△はい。

○おかけなさい。

△はい。(著席)

○みなさん、いくにんですか。(殘りの起立者の數を問ふ身振をして)

△ひとり　ふたり　さんにん　よにん、よにんです。(一齊に、また一人々々に)

次第に一人づつ著席させて殘りの起立者の數をいはせる。起立者が全部著席した時、

○いくにん　ゐますか。(起立者の數を問ふ身振をして)

△ひとりも　ゐません。(指導者も和して一齊に、後一人々々に)

次に、學習者を次第に一人づつ起立させ、その數を數へさせ、「十一人」に至り、また一名づつ著席させて殘りの起立者の數を數へさせ、「ひとりも　ゐません。」の問答に至る。

○そこに　ごいしが　あります。ごいしを　とを　とってください。(碁石の入れてある箱を指して)

△はい。(各自碁石を取る。)

○とを　とりましたか。

△はい、とりました。(一齊に)

○いくつ　ありますか、かぞへてごらんなさい。

△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつゝ　むっつ　なゝつ　やっつ　こゝのつ　とを、とを　あります。(一齊に、また一人々々に)

○ごいしを　ひとつ　おしまひなさい。(容器を指し示して)

△はい。

○いくつ　ありますか。
△ひとつ　ふたつ　みっつ　よっつ　いつゝ　むっつ　なゝつ　やっつ　こゝのつ、こゝのつ　あります。（指導者も和して一齊に、後一人々々に）
順次一つづつ減じて殘りを數へさせ、「ひとつも　ありません。」の　答に至る。
次に、碁石を一つ取出させ、順次一つづつ加へて數へさせ、「とを、とを　あります。」の　答に至る。

2　提示

○みなさん、いちから　ひゃくまで　かぞへる　ことが　できますか。
△まだ　よく　できません。（一齊に、また一人々々に）
○いちから　じふまで　かぞへる　ことが　できますか。
△はい、できます。（一人々々に）
○□さん、かぞへてごらんなさい。
△いち　に　さん　し　ご　ろく　しち　はち　く　じふ。（一人々々に）
○ごいしを　かぞへてごらんなさい。（碁石を指して）
△いち　に　さん　し　ご　ろく　しち　はち　く　じふ。（一人々々に）
○みなさん、そとへ　おでなさい。（庭を指し、靜かに出て、一列横隊に竝ばせる。）
かぞへて　あるきます。（十まで數へながら歩く。數回。）
みなさん、かぞへて　あるきませう。
△ゆつくり歩調を揃へて、指導者もともに數へながら歩く。十まで。數回繰返す。
○さあ、みなさん、たいさうを　しませう。

「たいさう」と數回繰返す。
△「たいさう」と一齊に數回繰返す。後一人一人に。
○先づ簡易な四呼稱の體操を示範する。
△示範にならふ。（指導者もともに）
○次に八呼稱の體操を示範する。
△示範にならふ。（指導者もともに）
○「げんき　よく。」といひながら、今までより力强く示範する。
げんき　よく。
△力强く體操をする。（指導者は示範する。）
○さあ、げんき　よく　たいさうを　しませう。
△示範によつて體操をする。
○學習者を二列に竝ばせ、一列に體操を行はせながら、他の列の學習者に向かつて、たいさうが　はじまりました。
といふ。
△たいさうが　はじまりました。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○はじまりました。
△はじまりました。（一齊に、また一人々々に）
○さあ、たいさうを　はじめませう。（示範）
△示範にならふ。（指導者もともに）
○げんき　よく。
△元氣よく體操をする。（指導者もともに）
○さあ、せきへ　かへりませう。
はしってはいけません。
かぞへて　あるきませう。
△歩數を數へながら、靜かに教室に歸る。
著席。
○みなさん、いま　なにを　しましたか。

△たいさうを　しました。(一齊に、また一人一人に)

○黒板に

タイソー

と書き、繰返していふ。

△**タイ・ソー**——**タイソー**。(一齊に、また一人一人に)

○黒板に、**タイソー**に續けて、

ガ　ハジマリマシタ

と書き、

タイソーガ　ハジマリマシタ

といふ。

△**タイソーガ　ハジマリマシタ**。(一齊に)

ハ・ジ・マ・リ——**ハジマリ**。(一人々々に)

○たいさうが　はじまりました。

「いち」と唱へながら**イチ**、「に」と唱へながら**ニ**と板書し、順次**ハチ**に至る。

イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ。(黒板の符號をたどりながら繰返す。)

△**イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ**。(一齊に、また一人々々に)

○**タイソーガ　ハジマリマシタ**。

イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ。

△**タイソーガ　ハジマリマシタ**。

イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ。(一齊に、また一人々々に)

○掛圖(ラジオ體操をしてゐる)を示して、

みんな　なにを　してゐますか。

△たいさうを　してゐます。(一齊に、また一人々々に)

○これは　こどもですか。(子供を指して)

△はい、さうです。(一齊に、また一人々々に)

○これは　こどもですか。(大人を指して)

△いゝえ、さうではありません。(一齊に、また一人々々に)

○これは　おとなです。(大人を指して)

おとな。(數回繰返す。)

△おとな。(一齊に、また一人々々に)

○黒板に

オトナ

と書き、

オ・ト・ナ——**オトナ**

といふ。

△**オ・ト・ナ**——**オトナ**。(一齊に、また一人一人に)

○おとなが　なにを　してゐますか。

△たいさうを　してゐます。(一齊に、また一人々々に)

○こどもが　なにを　してゐますか。

△たいさうを　してゐます。(一齊に、また一人々々に)

○おとなも　こどもも　げんき　よくたいさうを　してゐますか。

△はい、(おとなも　こどもも)　げんきよく　たいさうを　してゐます。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)

○黒板に

ゲンキ　ヨク

と書く。

△**ゲ・ン・キ・ヨ・ク**——**ゲンキ　ヨク**。(一齊に、また一人々々に)

○ほんの　こゝを　おあけなさい。(本の繪畫を見させ、符號をたどらせる。)

タイソーガ　ハジマリマシタ。

イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シ

チ　ハチ、
オトナモ　コドモモ
ゲンキ　ヨク　タイソーオ　シテイマス。
△タイソーガ　ハジマリマシタ。
イチ　ニ　サン　シ　ゴ　ロク　シチ　ハチ、
オトナモ　コドモモ
ゲンキ　ヨク　タイソーオ　シテイマス。

（發音・アクセント・抑揚等に注意して）

3　總括

○せんせいは　こどもですか。
△いゝえ、こどもではありません。（一齊に、また一人々々に）
○せんせいは　おとなですか。
△はい、（せんせいは）おとなです。（一齊に、また一人々々に）
○あなたは　おとなですか。（學習者の一人に）
△いゝえ、（わたくしは）おとなではありません、（わたくしは）こどもです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○こゝに　おとなが　いくにん　ゐますか。（掛圖を指して）
△いち　に　さん……、○にん　ゐます。（指導者もともに數へ、和して）
○こどもは　いくにん　ゐますか。（掛圖を指して）
△いち　に　さん……、○にん　ゐます。（指導者もともに數へ、和して）
○みんなで　いくにん　ゐますか。（掛圖を指して）
△いち　に　さん……、○にん　ゐます。（指導者もともに數へ、和して）
○なにが　はじまりましたか。（掛圖を指して）
△たいさうが　はじまりました。（一齊に、また一人々々に）
○おとなも　こどもも　げんき　よく　たいさうを　してゐますか。（掛圖を指して）
△おとなも　こどもも　げんき　よく　たいさうを　してゐます。

三　備　考

(一)　問答を學習者の眼前身邊の事實に卽せしめるため、校庭へ出ての行動に伴なふ學習等を加へた。動作に卽して言葉の學習を確實にすべきである。

(二)　序數詞は、本課に至つてその性質が確實にされる。數へるものをできるだけ多く變へて、興味を抱かせながら練習を確實にさせる。

(三)　ゲンキがケンキに訛りやすいから注意を要する。またアクセントによつてタイソー(體操)がタイソー(大層)にならぬやうに注意する必要がある。

(四)　イチ　ニ　サン等のアクセントは、號令または番號を呼ぶ時は本文に表記した型になる。中の卷第二頁と比較のこと。

第四課（第四頁）

一　教材

ガッコーエ　イク　ジカンニ　ナリマシタ。

「オトーサン、イッテマイリマス。」

「オカーサン、イッテマイリマス。」

ワタクシタチワ　ガッコーエ　デカケマシタ。

構文　〇〇サン、イッテマイリマス。

語彙　イク　ジカン　オトーサン　イッテマイリマス

オカーサン　デカケマシタ

〔教具〕掛圖。

二　指導

(一)　要領

1　登校その他、家を出る時の挨拶を修得させるのが本課の主眼である。

2　主として家庭に於ける挨拶であるから、教室では取扱ひにくい點があらうと思はれるが、掛圖や繪畫によつてその情景を想像させ、この場面の敍述や挨拶を修得さすべきである。

(二)　問答

1　復習

〇けふは　いゝ　てんきですね。

みなさん、けふは　なんぐわつ　なんにちですか。

△けふは　〇〇ぐわつ　〇〇にちです。

（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

〇けふは　なにえうびですか。

△けふは　げつ(くわ・すゐ・もく・きん・ど・にち)えうびです。（一齊に、また一人々々に）

〇いまは　なんじですか。（掛時計を指して）

△いまは　〇じ　〇〇ふ(ぷ)んです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

〇みなさんは　いま　なにを　してゐますか。

△にっぽんごを　ならってゐます。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

〇□さん、あなたの　うちには　こどもが　いくにん　ゐますか。（一人々々に）

△〇にん　ゐます。（または、「ひとりも　ゐません。」）

〇〇〇さん、あなたの　うちには　おと

なは　いくにん　ゐますか。（一人々々に）

△○にん　ゐます。

2　提示

○みなさん、ほんの　ゑを　ごらんなさい。（第二頁の繪畫を示して）なにをしてゐますか。

△あさの　ごはんを　たべてゐます。

○これは　○○さんです。（繪畫中の一人の子供を指して）

これは　どなたですか。（畫の中の父らしい人を指して）

△○○さんの　おとうさんです。（一人一人に）

○これは　どなたですか。（畫の中の母らしい人を指して）

△○○さんの　おかあさんです。（一人一人に）

○これは　どなたですか。（畫の中の妹らしい人を指して）

△○○さんの　いもうとさんです。

○みなさん、つぎの　ゑを　ごらんなさい。（登校前挨拶の畫を示しながら）なにを　してゐますか。

△がくかうへ　いく　あいさつを　してゐます。（指導者も和して、一人々々に）

○なんと　いって　あいさつを　してゐますか。いってごらんなさい。

△おとうさん、いってまゐります。

おかあさん、いってまゐります。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　いつですか。

△あさです。

○（あさの）　なんじごろでせう。

△○じごろでせう。

○あなたは　まいあさ　なんじに　でかけますか。

△（わたくしは　まいあさ）　○じ　○○ふ（ぷ）んに　でかけます。（指導者も和して、一人々々に）

○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら、

ガッコーエ　イク　ジカンニ　ナリマシタ。

「オトーサン、イッテマイリマス。」

「オカーサン、イッテマイリマス。」

ワタクシタチワ　ガッコーエ　デカケマシタ。

と繰返していふ。

△本の符號をたどりながらいふ。（一齊に、また一人々々に）

○□さん、きのふ　どこへ　でかけましたか。

△○○へ　いきました。

○□さんは　どこへ　でかけましたか。

△○○へ　いきました。（なるべく多く、一人一人に）

3　總括

○再び本を開かせ、登校前の挨拶の繪を見させながら、

このかたは　どなたですか。（父を指しながら）

△おとうさんです。（一人々々に）

○このかたは。（母を指して）

△おかあさんです。（一人々々に）

○もう　がくかうへ　いく　じかんになりましたか。（黑板に時計の繪を畫き、適當な時間を示しながら）

△はい、もう　がくかうへ　いく　じかんに　なりました。（一人々々に）
○おとうさんに　なんと　いひますか。
いってごらんなさい。
△おとうさん、いってまゐります。（一齊に、また一人々々に）
○おかあさんに　なんと　いひますか。
いってごらんなさい。
△おかあさん、いってまゐります。（一齊に、また一人々々に）
○おとうさん、いってまゐります。
おかあさん、いってまゐります。
△おとうさん、いってまゐります。
おかあさん、いってまゐります。（一齊に、また一人々々に）
○けさ　ゐたくしたちは　なんじに　がくかうへ　きましたか。
△（わたくしたちは　けさ）○じに（がくかうへ）きました。（一人々々に）
○いまは　なんじですか。
△○じ　○ふ（ぷ）んです。（一人々々に）
○もう　かねが　なる　じかんに　なりましたか。
△はい、もう　かねが　なる　じかんになりました。
○もう　うちへ　かへる　じかんに　なりましたか。
△はい、もう　うちへ　かへる　じかんに　なりました。（一人々々に）

三　備　考

(一)　教材の性質上、主として繪畫による學習を行はせなくてはならないが、できるだけ學習者の日常身邊の事實に卽して練習を

行ひ、この挨拶ができるやうにしなくてはならない。

(二)　「じかんになりました。」は「でかけました。」とともに、領得に困難を感ずるかも知れない。事例に卽して會得するやうに努めなければならない。

第五課（第五頁）

一　教材

センセーガ　イラッシャイマシタ。
ワタクシタチワ　センセーニ　ゴアイサツオ　シマシタ。
「センセー、オハヨーゴザイマス。」
センセーモ
「ミナサン、オハヨー。」
ト　オッシャイマシタ。

構文　〇〇ガ　イラッシャイマシタ。
オハヨーゴザイマス。

語彙　イラッシャイマシタ　ゴアイサツ　オハヨーゴザイマス
オッシャイマシタ

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前課が登校の挨拶であつたのを承けて、指導者への朝の挨拶を授けるのが本課の要旨である。

2　「おはやう。」と「おはやうございます。」とは、日常の挨拶としては既に耳なれてゐる言葉であるが、相手によつて區別しなくてはならないことを確實に會得せしめなくてはならない。なほ、「いらっしゃいました。」「おっしゃいました。」といふ、長上に對する敬語の用法を會得させることが必要である。

(二)　問答

1　復習

○□さん、けさ　なんじに　がくかうへ　でかけましたか。
△○じ　〔○ふ(ぷ)ん〕に　(がくかうへ)　でかけました。(一人々々に)
○おとうさんに　なんと　いひましたか。
いってごらんなさい。
△おとうさん、いってまゐります。(一齊に、また一人々々に)

○おかあさんに　なんと　いひましたか。
　いってごらんなさい。
△おかあさん、いってまゐります。（一齊に、また一人々々に）
○がくかうへ　きて　せんせいに　なんと　いひますか。いってごらんなさい。
△せんせい、おはやうございます。（一齊に、また一人々々に）
○せんせいは　なんと　いひましたか。
　いってごらんなさい。
△みなさん、おはやう。（一齊に、また一人一人に）

2　提示

○本の繪畫を見させ、
　こゝは　がくかうです。
　せいとが　おほぜい　ゐます。
　これは　どなたですか。（先生を指して）
△せんせいです。（一人々々に）
○さうです。
　いま、せんせいが　いらっしゃいました。いってごらんなさい。
△いま、せんせいが　いらっしゃいました。（一齊に、また一人々々に）
○「いらっしゃいました」といひながら、黑板に
　イラッシャイマシタ
　と書き、**イラッシャイマシタ**と數回繰返していふ。
△**イラッシャイマシタ**。（一齊に、また一人一人に）
○これは　どなたですか。（先生に挨拶してゐる一人を指して）
△○○さんです。（または「せいとです。」）
○いま　○○さん（せいと）は　なにを　してゐますか。
△せんせいに　ごあいさつを　しました か。いってごらんなさい。（一人々々に）
△せんせい、おはやうございます。
○せんせいは　なんと　おっしゃいました か。
△「おはやう。」と　おっしゃいました。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○「おっしゃいました」といひながら、
　オッシャイマシタ
　と書き、**オッシャイマシタ**と繰返していふ。
△**オッシャイマシタ**。（一齊に、また一人一人に）
○みなさん、せんせいに　なんと　いひましたか。
△「せんせい、おはやうございます。」といひました。（一齊に、また一人々々に）

○「ごあいさつ」といひながら、黑板に
　ゴアイサツ
　と書き、**ゴアイサツ**と繰返していふ。
△**ゴアイサツ**。（一齊に、また一人々々に）
○せんせいに　なんと　ごあいさつを　してゐますか。（指導者も和して一齊に、また一人一人に）
△せんせい、おはやう。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○せんせいは　なんと　おっしゃいました か。
△□さん、けさ　あなたは　せんせいに　なんと　ごあいさつを　しました か。いってごらんなさい。（一人々々に）
○みなさん、せんせいに　なんと　いひましたか。
△「せんせい、おはやうございます。」といひました。（一齊に、また一人々々に）

○せんせいは　なんと　おっしゃいましたか。

△「みなさん、おはやう。」と　おっしゃいました。（一齊に、また一人々々に）

○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら、

センセーガ　イラッシャイマシタ。

ワタクシタチワ　センセーニ　ゴアイサツオ　シマシタ。

「センセー、オハヨーゴザイマス。」

センセーモ、

「ミナサン、オハヨー。」

ト　オッシャイマシタ。

と、數回繰返していふ。

△符號をたどりながらいふ、一人々々に。

この時、アクセント・發音抑揚等に注意を要する。

3　總括

○一家團欒の掛圖を掲げ示しながら、

これは　どなたですか。（父を指して）

△おとうさんです。（一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（母を指して）

△おかあさんです。（一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（祖父を指して）

△おぢいさんです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（祖母を指して）

△おばあさんです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（兄を指して）

△にいさんです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（姉を指して）

△ねえさんです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（弟を指して）

△おとうとです。（一齊に、また一人々々に）

○これは　どなたですか。（妹を指して）

△いもうとです。（一齊に、また一人々々に）

○あさ、おとうさんに　なんと　ごあいさつをしますか。いってごらんなさい。

△おとうさん、おはやうございます。（一齊に、また一人々々に）

○おかあさんに　なんと　ごあいさつをしますか。いってごらんなさい。

△おかあさん、おはやうございます。（一齊に、また一人々々に）

次第に祖父・祖母・兄・姉への朝の挨拶を練習する。

○おとうとには。

△「おはやう。」と　いひます。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○いもうとには。

△「おはやう。」と　いひます。（一齊に、また一人一人に）

○がくかうへ　いく　じかんに　なりました。

おとうさんに　なんと　ごあいさつをしますか。いってごらんなさい。

△おとうさん、いってまゐります。（一人一人に）

○おかあさんに　なんと　ごあいさつをしますか。いってごらんなさい。

△おかあさん、いってまゐります。（一人一人に）

次第に祖父・祖母・兄・姉等への朝の挨拶を練習する。

三　備考

(一)　本課は日常行つてゐた挨拶を理解させて確實にするのが本旨であるけれども、說明して理解させるのでなく、用例によつて會得させるのが肝要である。總括で家族としてのいろ〳〵な關係者を出したのも、相手によつて異なる挨拶の仕方を、用例から會得させるための一つの工夫にほかならない。

(二)　學習者數人を選び、先生を假定し、登校の際の挨拶を實演させるのも效果が多いであらう。

第六課　（第六頁）

一　教材

トーキョーカラ　ホーテンオ　トーッテ　ペキンエ　イキマス。

ペキンマデノ　キシャチンワ　クジューニエン　ハッセンデス。

モシ　フタリデ　イケバ　イクラ　カカルデショーカ。

構文　○○カラ　○○オ　○○テ　○○エ　イキマス。

モシ　○○バ　○○デショーカ。

語彙　トーキョー　ホーテン　ペキン　キシャチン　クジューニエン　ハッセン　モシ　イケバ　イクラ　カカル

〔教具〕略地圖（東京・奉天・北京を示す）・汽車の圖・切符・通貨等。

二　指　導

(一)　要　領

1　第一課から第八課までは學習者の一日の生活に沿つた經驗を教材としてゐるが、本課はその中の一課として教室の學習生活を挿入したものである。

2　教材は、この程度の學習者には困難ではないかと思はれ易いが、實際の指導に於ては、學習者の身邊の事實に卽してこの構文や語彙を修得させるのであるから、さして困難なく指導し得るであらう。

3　敍上のやうに、經驗の事實について修得練習させた後に、その應用として教科書の表現をいはせるのが適切な指導であらう。

(二)　問　答

1　復習

○あなたは　こうゑんへ　いきましたか。

△はい、こうゑんへ　いきました。（一人一人に）

○どなたと　いっしょに　いきましたか。

△おとうさん（○○さん）と　いっしょに　いきました。（一人々々に）

○あなたは　ひとりで（こうゑんへ）いく　ことが　できますか。

△わたくしは　ひとりで（こうゑんへ）いく　ことが　できます（できません）。（一人々々に）

○おとうさんや　おかあさんに　なんと　ごあいさつを　して　でかけますか。

いってごらんなさい。

△おとうさん、いってまゐります。

おかあさん、いってまゐります。（一人一人に）

2　提示

○がくかうから　○○を　とほって　こうゑんへ　いきますか。

△はい、がくかうから　○○を　とほって　こうゑんへ　いきます。（一人々々に）

○その　みちを　なにが　とほってゐますか。（學校近くの道を通る自動車を指して）

△じどうしゃが　とほってゐます。（一人一人に）

○じどうしゃは　こうゑんへ　いきますか。

△こうゑんへ　いきます。（一人々々に）

○じどうしゃも　○○を　とほって　いきますか。

△はい、○○を　とほって　いきます。（一人々々に）

○がくかうから　こうゑんまでの　じどうしゃちんは　いくらですか。（「じどうしゃちん」と繰返していひ、財布を取出し、乘車賃の意を明らかにする。）

△（がくかうから　こうゑんまでの　じどうしゃちんは）ごせんです。（一人々々に）

○それは　ひとりの　じどうしゃちんですか、ふたりの　じどうしゃちんですか。

△ひとりの　じどうしゃちんです。（一人一人に）

○ふたりで　いけば　じどうしゃちんはいくらですか。（「いくら」と繰返していひ、金額の意を明らかにする。）

△じっせんです。（一人々々に）

○この　きっぷは　○○から　△△までのです。（切符を掲げ示しながら）いちまい　じっせんです。

ふたりで　のれば　いくら　かゝるでせうか。

△ふたりで　のれば　にじっせん　かゝります。（一人々々に）

○もし　さんにんで　のれば　いくらかゝるでせうか。

△さんにんで　のれば　さんじっせんかゝります。（一人々々に）

○これは　なんですか。（汽車の畫を掲げ示して）

△きしゃです。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○**キシャ**

と板書し、繰返していふ。

△**キシャ**。（一人々々に）

○きしゃが　はしってゐますね。（畫を指しながら）

みなさん、きしゃに　のった　ことがありますか。

△はい、あります。（または「いゝえ、ありません。」）

○ぺきんへ　いきましたか。

△はい、いきました。（または「いゝえ、いきません。」）

○地圖を掲げ示してそれ〴〵の地を指しながら、

こゝが　ぺきんです。（「ぺきん」と繰返していふ。學習者もいふ。）

こゝが　ほうてんです。（同前）

こゝが　とうきゃうです。（同前）

○こゝは　どこですか。（北京を指して）

△ぺきんです。（一齊に、また一人々々に）

○**ペキン**

と板書し、**ペキン**と繰返していふ。

△**ペキン**。（一人々々に）

○こゝは　どこですか。（奉天を指して）

△ほうてんです。（一齊に、また一人々々に）

○**ホーテン**

と板書し、**ホーテン**と繰返していふ。

△**ホーテン**。（一人々々に）

○こゝは　どこですか。（東京を指して）

△とうきゃうです。（一齊に、また一人々々に）

○**トーキョー**

と板書し、**トーキョー**と繰返していふ。

△**トーキョー**。（一人々々に）

○とうきゃうから　ほうてんまで　なにに　のっていきますか。（地圖を指しながら）

△きしゃに　のっていきます。（一人々々に）

○ほうてんから　ぺきんまで　なにに　のっていきますか。（地圖を指しながら）

△きしゃに　のっていきます。（一人々々に）

○これは　なんですか。（汽車の切符を掲

げ示して)

△きっぷです。(指導者も和して一齊に、また一人一人に)

○きっぷ。(繰返す。)

△きっぷ。(一人々々に)

○これは　どこから　どこまでの　きっぷですか。(切符を示し、または切符を圖示して)

△とうきゃうから　ぺきんまでの　きっぷです。(一人々々に)

○きしゃちん。(と繰返していひながら、切符を示し、また財布を示して、その意を明らかにする。)

きしゃちんは　いくらですか。(圖示した切符の金額の符號を指して)

○△**クジューニエン　ハッセン**。(繰返す。)

○拾圓紙幣として紙幣大の紙九枚を數へさせて**クジュー　エン**と板書し、壹圓紙幣として紙幣大の紙を二枚數へさせて**ニ**を書加へ(または壹圓紙幣として紙幣大の紙を九十二枚數へさせ)、なほ壹錢銅貨八枚を數へさせて**ハッセン**と書き足す。

クジューニエン　ハッセン。(繰返す。)

△**クジューニエン　ハッセン**。(一人々々に)

○くじゅーふにゑん　はっせん。

たくさんですね。

それは　なんの　おかねですか。

△きしゃちんです。(一人々々に)

○さうです。きしゃちんです。(といひながら、さきに板書した符號**キシャ**の下に**チン**と書加へる。)

キシャチン。(繰返す。)

△**キシャチン**。(一人々々に)

○これは　ひとりの　きしゃちんですか、ふたりの　きしゃちんですか。

△(それは)　ひとりの　きしゃちんです。(一人々々に)

○もし　ふたりで　いけば　いくら　かかるでせうか。

△必ずしも計算して答を求めるには及ばない。指導者の問を復誦し、答を考へればそれでよい。但し、質問の意味は十分領得せしめなくてはならない。

もし　ふたりで　いけば　いくら　かかるでせうか。(いひながら答を考へる。)

○**モシ　フタリデ　イケバ　イクラ　カカルデショーカ**(と板書し、繰返していふ。)

△**モシ　フタリデ　イケバ　イクラ　カカルデショーカ**。(一人々々に)

○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながらいふ、繰返して。

△符號をたどりながらいふ、一人々々に。(發音・抑揚・アクセント等を正す。)

○本を離れて、

がくかうから　こうゑんまでの　じどうしゃちんは　いくらですか。

△ごせんです。(一人々々に)

○ふたりで　いけば　いくら　かゝるでせうか。

△じっせん　かゝります。(一人々々に)

○もし　さんにんで　いけば　いくらかゝるでせうか。

△じふごせん　かゝります。(一人々々に)

3　總括

○○○から　△△までの　じどうしゃち

んは　いくらですか。（さきに示した切符をまた掲げ示して）

△（〇〇から　△△までの　じどうしゃちんは）じっせんです。

〇とうきゃうから　ぺきんまでの　きしゃちんは　いくらですか。

△（とうきゃうから　ぺきんまでの　きしゃちんは）くじふにゑん　はっせんです。（一人々々に）

〇〇〇から　△△まで　ふたりで　いけば　いくら　かゝるでせうか。

△（ふたりで　いけば）にじっせん　かゝります。（一人々々に）

〇とうきゃうから　ぺきんまで　ふたりで　いけば　いくら　かゝるでせうか。

△たくさん　かゝります。（一人々々に）

〇この　ペンは　いっぽん　じっせんです。（ペンを掲げ示して）

もし　さんぼん　かへば　いくら　かかるでせうか。（買ふ身振をして）

△さんじっせん　かゝります。（一人々々に）

三　備考

（一）教科書の表現は後日の練習に備へるための手がかりであるから、それを提示する前に、地方に即した適例を採つて、この語彙や構文を學習させることを忘れてはならない。

（二）時間の都合によつては、北京から東京へ行くことにして問答するのもよいであらう。

第七課（第七頁）

一　教材

ユキコサント　キヌコサント　マサコサンガ
ナワトビオ　シテイマス。
イマ　ユキコサンガ　トンデイマス。
イッペン　ニヘン　サンベン　シヘン　ゴヘン
ロッペン　シチヘン　ハチヘン　クヘン　ジッペン。

構文

語彙　ユキコサン　キヌコサン　マサコサン
ナワトビ　イッペン　ニヘン　サンベン
シヘン　ゴヘン　ロッペン　シチヘン

ハチヘン　クヘン　ジッペン

符號

〔教具〕掛圖（繩飛をしてゐる）・時計・碁石・本・鉛筆等。

二　指　導

(一)　要　領

1　前課の教材が教室に於ける學習であつたのを承け、本課では校庭に於ける遊戯に取材した。度數を計る言葉を學習させるのが本課の主眼である。

2　數詞については、第三課と連絡し、また身邊の事實に適用して練習を十分ならしめることが必要である。

(二)　問　答

1　復習

○みなさん、いちから　ひゃくまで　かぞへる　ことが　できますか。（一人一人に）

△まだ　よく　できません。

○□さん、いちから　じふまで　かぞへる　ことが　できますか。

△はい、できます。

○かぞへてごらんなさい。

△いち　に　さん　し　ご　ろく　しち　はち　く　じふ。（一齊に、また一人々々に）

○これを　かぞへてごらんなさい。（碁石を示して二十まで數へさせる。）

△ひとつ　ふたつ……にじふ。（一齊に、また一人々々に）

○□さん、この　かみを　かぞへてごらんなさい。（卓上の紙を示して）

△いちまい　にまい　さんまい　よまい　ごまい　ろくまい　しちまい　はちまい　くまい　じふまい。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○みんなで　いくまい　ありますか。

△じふまい　あります。（一人々々に）

○□さん、この　ほんを　かぞへてください。（卓上の本を指して）

△いっさつ　にさつ　さんさつ　しさつ　ごさつ　ろくさつ　しちさつ　はっさつ　くさつ　じっさつ。（困難な箇所は指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○みんなで　いくさつ　ありますか。

△じっさつ　あります。（指導者も和して、一人々々に）

2　提示

○みなさん、この　ひとたちは　なにをしてゐますか。（掛圖を掲げ示しながら）

△なはとびを　してゐます。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）

○**ナワトビ**

と板書し、**ナワトビ**と繰返していふ。

△**ナワトビ**。（一人々々に）

○□さん、あなたは　なはとびを　した　ことが　ありますか。
△はい、(なはとびを　した　ことが)　あります。
○いっぺん　にへん　さんべん　しへん　ごへんと　かぞへます。
かぞへてごらんなさい。
△いっぺん　にへん　さんべん　しへん　ごへん　ろっぺん　しちへん　はちへん　くへん　じっぺん。(指導者も和して、一人々々に)
○ほんの　ゑを　ごらんなさい。
このかたは　ゆきこさんです。
といひながら、
ユキコサン
と板書し、**ユキコサン**と繰返していふ。
△**ユキコサン**。(一人々々に)
○これは　きぬこさんです。
といひながら、
キヌコサン
と板書し、**キヌコサン**と繰返していふ。
△**キヌコサン**。(一人々々に)
○これは　まさこさんです。
といひながら、
マサコサン
と板書し、**マサコサン**と繰返していふ。
△**マサコサン**。(一人々々に)
○これは。(「ゆきこさん」を指して)
△ゆきこさん。(一齊に、また一人々々に)
○これは。(「きぬこさん」を指して)
△きぬこさん。(一齊に、また一人々々に)
○これは。(「まさこさん」を指して)
△まさこさん。(一齊に、また一人々々に)
○いくにんで　なはとびを　してゐます

か。
△ひとり　ふたり　さんにん、さんにんで(なはとびを)　してゐます。(一人一人に)
○いま　だれが　とんでゐますか。
△(いま)　ゆきこさんが　とんでゐます。(一人々々に)
○なんと　いって　かぞへてゐますか。
いってごらんなさい。
△いっぺん　にへん……じっぺん。
○黒板に
イッペン
と書き、**イッペン**と繰返していふ。
△**イッペン**。(一齊に、また一人々々に)
○以下同様にして「じっぺん」に及ぶ。
△さあ、いっしょに　いってごらんなさい。
△**イッペン　ニヘン……ジッペン**。(黒板の符號をたどりながら、一齊に。また一人々々に)
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながらいふ。
ユキコサント　キヌコサント　マサコサンガ　ナワトビオ　シテイマス。
イマ　ユキコサンガ　トンデイマス。
イッペン　ニヘン　サンベン　シヘン　ゴヘン　ロッペン　シチヘン　ハチヘン　クヘン　ジッペン。
△本の符號をたどりながらいふ。
3　總括
○輕く拍手しながら、それを數へさせる。
△ひとつ　ふたつ……とを……にじふ……(一齊に拍手しながら、はじめ十まで、次に二十まで。)

○鉛筆を數へさせる。
△いっぽん　にほん……じっぽん、じっぽんあります。（一人々々に）
○ごむまりを數へさせた後、それをゆつくりつきながら數へさせる。
△いっぺん　にへん……じっぺん。（一人一人に）
○學習者を數へさせる。
△ひとり　ふたり……じふにん。（一人一人に）
○掛時計の時を指していはせる。
△いちじ　にじ　さんじ　よじ　ごじ……じふにじ。（一齊に、また一人々々に）
△○その他。

三　備　考

(一)　數詞は上及び中の卷に頻出し、下の卷に於ては本課以後は極めて少い。まづ本課に於て十までを十分練習し、できるならば二十まで確實に學習させるべきである。

(二)　「ひとり」「ふたり」といふ數へ方は、特別注意して指導する必要がある。

(三)　イッペン等のアクセントは、名詞として用ひられる時、また本課の如く數をよぶために用ひられる時は、本文に表記した型になる。副詞として用ひられる時、例へば「ニヘン　ミマシタ。」のニヘンの如きは平板になる。

第八課（第八頁）

一　教　材

ジュギョーガ　オワリマシタ。
センセーニ　ゴアイサツオ　シマシタ。
「センセー、サヨーナラ。」
「ミナサン、サヨーナラ。」

構文　**○○(サン)　サヨーナラ。**
語彙　**ジュギョー　オワリ(マシタ)　サヨーナラ**
符號

二　指　導

〔教具〕　掛圖（教室內學習の圖、繩飛の圖）。

(一)　要　領

1　前三課と關聯して、退校の際に於ける挨拶を學習させるのが本課の主眼である。特に第五課の、登校時に於ける朝の挨拶と對應してゐることに留意しなくてはならない。

2　挨拶は對者に對する敬意の表現であるから、言葉とともに、これに伴なふ動作を指導しなくてはならない。

(二)　問　答

1　復習

○けさ、おとうさんや　おかあさんに　あさの　ごあいさつを　しましたか。

△はい、しました。(一人々々に)

○なんと　ごあいさつを　しましたか。

いってごらんなさい。

△おとうさん、おはやうございます。おかあさん、おはやうございます。(一人一人に)

○けさ　がくかうへ　でかけるとき、おとうさんや　おかあさんに　なんと　ごあいさつを　しましたか。いってごらんなさい。

△おとうさん、いってまゐります。おかあさん、いってまゐります。(一人一人に)

○がくかうへ　ついたとき、せんせいに　なんと　ごあいさつを　しましたか。いってごらんなさい。

△せんせい、おはやうございます。(一人一人に)

○おともだちに　なんと　ごあいさつを

しましたか。いってごらんなさい。

△□さん、おはやうございます。(一人一人に)

2　提示

○じゅげふが　はじまりました。(教室に於ける學習の繪畫を掲げ示し、學習開始の身振をしながら)

じゅげふ。(と繰返していふ。)

△じゅげふ。(一齊に、また一人々々に)

○なにが　はじまりましたか。

△じゅげふが　はじまりました。(一人一人に)

○いよ〳〵學習が開始せられたといふ態度で、

なにを　してゐますか。(繩飛の繪畫を掲げ示しながら)

△なはとびを　してゐます。(一人々々に)

○どなたが　なはとびを　してゐますか。(繪を指しながら)

△ゆきこさんと　きぬこさんと　まさこさんが　(なはとびを)　してゐます。(一人一人に)

○いま　どなたが　とんでゐますか。(繪を指しながら)

△いま　ゆきこさんが　とんでゐます。(一人々々に)

△○　いっぺん　にへん　さんべん　しへん　ごへん　ろっぺん　しちへん　はちへん　くへん　じっぺん。

(指導者は、飛ぶ回數を數へる身振をし、學習者はそれに連れていふ。)

○みなさん、ほんの　しちページを　おあけなさい。

その　ゑを　みて　いってごらんなさ

い。
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)
○みなさん、ほんを　おしまひなさい。
△本を机の中に納める。
○じゅげふが　をはりました。(これで學習が終つたといふ身振で)
△じゅげふが　をはりました。(一齊に、また一人々々に)
○黒板に
ジュギョーガ　オワリマシタ
と書き、繰返していふ。
△**ジュギョーガ　オワリマシタ**。(一人一人に、また一齊に)
○せんせいに　なんと　ごあいさつをしますか。
△せんせい、さやうなら。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)
○「みなさん、さやうなら。」といひながら、黒板に
サヨーナラ
と書き、繰返していふ。
△**サヨーナラ**。(一齊に、また一人々々に)
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら、
ジュギョーガ　オワリマシタ。
センセーニ　ゴアイサツオ　シマシタ。
「センセー、サヨーナラ。」
「ミナサン、サヨーナラ。」
繰返していふ。
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)
○本を離れて、
みなさん　きのふも　じゅげふが　ありましたか。
△はい、ありました。(一齊に)

○じゅげふが　をはつて　かへるとき　せんせいに　なんと　ごあいさつを　しましたか。
△「せんせい、さやうなら。」と　いひました。(一齊に、また一人々々に)
○おともだちに　なんと　ごあいさつをしましたか。(隣席の學習者を指しながら)
△□さん、さやうなら。」と　いひました。(一人々々に)

3　總括

○みなさん、おたちなさい。
△起立。(一齊に)
○みなさん、せきを　おはなれなさい。
△席の外に立つ。(一齊に)
○體操の號令をかける。
△一二種の動作をする。
○なにが　はじまりましたか。
△たいさうが　はじまりました。
○せきに　おつきなさい。
△着席する。
○たいさうが　はじまりましたか、をはりましたか。
△をはりました。
○その他。
△

三　備　考

(一)「をはりました。」は第三頁の「はじまりました。」に、「さやうなら。」は第五頁の「おはやう。(おはやうございます。)」に比較對照して學習を進めるべきである。

(二)　挨拶の言葉とともに行はれる、指導者(長上)に對する丁寧な敬禮、同輩に對する輕い會釋等も、それとなく指導すべきである。

(三)「をはりました。」は、身邊に有合はせた適當な例で練習させる方が效果を大ならしめる。「さやうなら。」は日常用ひてゐる挨拶であるから、こゝではそれに伴なふ心持や作法の指導に及ぶべきである。

第九課（第九頁）

一　教材

ミセガ　タクサン　ナランデイマス。
ヒトガ　オーゼー　アルイテイマス。
デンシャヤ　ジドーシャガ
タクサン　トーッテイマス。

構文

語彙　ミセ　ナランデ　デンシャ

符號

〔教具〕掛圖（繁華で交通頻繁な市街の繪畫）。

二　指導

(一)　要　領

1　前數課が一日の生活に關した家庭生活・學校生活の教材であつたのから一轉して、本課以下は社會生活の教材を採つた。

2　既習の構文に即して「たくさん」「おほぜい」といふやうな副詞を的確に用ひることを練習させることが本課の主眼である。

3　生活の喜びを感じさせ、都市に於ける文化的施設に着眼させながら授ける。

(二)　問　答

1　復習

遠足・見學等の經驗を思ひ起させて「たくさん」「おほぜい」といふやうな副詞を用ひさせ、更に「ひとがあるいてゐました。」「じどうしゃがとほつてゐました。」といふ既習の構文・語彙の復習をさせて、本教材學習の準備とする。

2　提示

○□さん、おたちなさい。
△はい。(一學習者起立。)
○□さん、おたちなさい。
△はい。(隣席の一學習者起立。)
○□さんと　□さんが　ならんでゐます。(繰返して)　いつてごらんなさい。
△□さんと　□さんが　ならんでゐます。(一齊に、また一人々々に)
○□さん、おたちなさい。
△はい。(また、隣席の一學習者起立。)
○みなさん、いくにん　たつてゐますか。
△さんにん　たつてゐます。

○さうです。いくにん　ならんでゐますか。
△さんにん　ならんでゐます。(一人々々に)
○繁華な市街の繪畫を掲げ示しながら、これは　なんの　ゑですか。
△まちの　ゑです。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)
○まち。(繰返していふ。)
△まち。(一齊に、また一人々々に)
○いへが　たくさん　ならんでゐますね。(櫛比してゐる町家を指しながら)
これは　なんですか。(畫中の店を指して)
△みせです。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)
○みせ。(繰返して)
○黒板に
ミセ
と書き、**ミセ**と繰返していふ。
△**ミセ**。(一人々々に)
○これは　なんですか。(畫中の他の店を指して)
△それも　みせです。(一人々々に)
○これは　なんですか。(畫中の他の店を指して)
△それも　みせです。(一人々々に)
○その他。
○なにが　ならんでゐますか。
△みせが　ならんでゐます。(一人々々に)
○さうです。みせが　たくさん　ならんでゐます。
といひながら、黒板に

ナランデイマス
と書き、繰返していふ。
△**ナランデイマス**。（一人々々に）
○なにが　あるいてゐますか。（畫中の通行人を指して）
△ひとが　あるいてゐます。（一人々々に）
○いくにん　あるいてゐますか。（人が何人か相續いて往來するといふ身振をして）
△ひとり　ふたり　さんにん　よにん……。
おほぜい　あるいてゐます。（指導者も和して一齊に、また一人々々に）
○さうです。
ひとが　おほぜい　あるいてゐます。
なにが　とほってゐますか。（畫中の自動車を指して）
△じどうしゃが　とほってゐます。（一人一人に）
○これは　なんですか。（電車を指して）
△でんしゃです。
○さうです。でんしゃも　とほってゐますね。
でんしゃ。（と繰返していふ、畫中の電車を指しながら）
△でんしゃ。（一齊に、また一人々々に）
○黒板に
デンシャ
と書き、**デンシャ**と繰返していふ。
△**デンシャ**。（一人々々に）
○これは　なんですか。（畫中の自動車を指して）
△じどうしゃです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（畫中の電車を指して）

△でんしゃです。（一人々々に）
○でんしゃや　じどうしゃが　いくつとほってゐますか。（畫中の電車・自動車を指し、なほ相續いて來往するといふ身振をしながら）
△でんしゃや　じどうしゃが　たくさんとほってゐます。（一人々々に）
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら、繰返していふ。
△符號をたどりながらいふ、一人々々に。
（發音・アクセント・抑揚等を正す。）
○第四十三頁を開かせ、繪畫を見させて、
これは　なんの　ゑですか。（本を掲げ、繪を指しながら）
△これは　まちの　ゑです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（店を指して）
△これは（おほきい）みせです。（一人一人に）
○みせが　いくつ　ならんでゐますか。
△みせが　たくさん　ならんでゐます。（一人々々に）
○ひとが　いくにん　あるいてゐますか。
△ひとが　おほぜい　あるいてゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（自動車を指して）
△じどうしゃです。（一人々々に）
○これは　なんですか。（電車を指して）
△でんしゃです。（一人々々に）
○でんしゃや　じどうしゃが　いくつとほってゐますか。
△（でんしゃや　じどうしゃが）たくさんとほってゐます。

3　總括

△○學校附近の店舗を材料にして問答する。

三　備　考

(一)「たくさん」は物にも人にも用ひるが、「おほぜい」は人以外には用ひないことを、用例によつて會得させる必要がある。

(二)　繪畫の取扱に於ては、本課の繪畫に併せて、第四十三頁の繪畫を利用するのが好都合であらう。

第十課（第十一頁）

一　教　材

オンナノヒトガ　クツシタオ　カッテイマス。

「コレワ　イクラデスカ。」

「ハチジューゴセンデス。」

「デワ、コレオ　クダサイ。」

オンナノヒトガ　オカネオ　ワタシマシタ。

ミセノ　ヒトワ　オカネオ　ウケトッテ

「アリガトーゴザイマス。」

ト　イイマシタ。

構文

語彙　**クツシタ　カッテ(イマス)　ハチジューゴセン　デワ**
オカネ　ワタシ(マシタ)　ウケトッテ
符號

〔教具〕　貨幣・紙幣の代用品(小石・紙切等)。

二　指　導

(一)　要　領

1　前課の「みせ」に聯關した教材である。「みせ」で物を買ふ場合の會話を修得させるのが本課の主眼である。

2　事柄の進行に伴なつて會話が發展して行く構文であることに留意して指導することが肝要である。

(二)　問　答

1　復習

○この　ゑを　どらんなさい。(前課の掛圖を掲げて)
こゝは　なんですか。
△まちです。
○これは　なんですか。(自動車を指して)
△じどうしゃです。

○これは。(電車を指して)
△でんしゃです。
△でんしゃや　じどうしゃが　たくさん　とほってゐますか。
△はい、(でんしゃや　じどうしゃが)　たくさん　とほってゐます。
○きしゃも　とほってゐますか。
△きしゃは　とほってゐません。
○ひかうきは　とんでゐますか。
△ひかうきは　とんでゐません。
○ひとが　おほぜい　あるいてゐますか。
△はい、(ひとが)　おほぜい　あるいてゐます。
なほ第四十三頁東京市街の寫眞を見させ「こゝは　とうきやうです。」と話し、同樣に練習するのもよい。
○この　いへは　なんですか。(店を指して)
△みせです。
○みせが　たくさん　ならんでゐますね。
△はい、(みせが)　たくさん　ならんでゐます。
○わたくしは　この　ほんを　みせで　かひました。(本を掲げ示して)
あなたは　その　ほんを　どこで　かひましたか。
△みせで　かひました。
○この　ほんは　□せんです。
その　ほんは　いくらですか。
△□せんです。
その他、紙・帽子・硯・墨・ペン・鉛筆等について同樣に練習を行ふ。

2　提示

○□さん、あなたは　みせの　ひとで

す。（一學習者を指定して適當な席にゐさせ、その前の机上に本、鉛筆等をおき、定價をいつておく。）

○みなさん、□さんは　いま　なにになりましたか。

△みせの　ひとに　なりました。

○□さんの　みせは　なにを　うつてゐますか。

△ほんや　えんぴつを　うつてゐます。

○では、わたくしは　ほんを　かひませう。

この　あつい　ほんは　いくらですか。

△ごじっせんです。

○この　ちひさい　ほんは　いくらですか。

△じっせんです。

○では、これを　ください。（厚い本を指して代金を渡す。）

△ありがたうございます。（代金を受取り、本を渡していふ。）

最初は、指導者が言葉を添へる必要があるであらう。

○みなさん、わたくしは　いま　なにをかひましたか。（本を掲げて）

△（あつい）ほんを　かひました。

○これは　いくらですか。

△ごじっせんです。

○わたくしは　この　ほんを　どこでかひましたか。

△□さんの　みせで　かひました。

○□さんの　みせでは　なにを　うつてゐますか。

△ほんや　えんぴつを　うつてゐます。

○では、こんどは　えんぴつを　かひませう。

この　えんぴつは　いくらですか。

△にせんです。

○これは。

△さんせんです。

○では、これを　ください。（三錢の鉛筆を指して）

みなさん、わたくしは　いま　なにをかつてゐますか。

△えんぴつを　かつてゐます。

○□さんは（みせの　ひとは）なにをうつてゐますか。

△えんぴつを　うつてゐます。

○わたくしは　いま　いくせんの　えんぴつを　かつてゐますか。

△さんせんの　えんぴつを　かつてゐます。

○これは　おかねです。いくせん　ありますか。（學習者全部に向かつて）

△いっせん　にせん　さんせん、さんせん　あります。

○では、みせの　ひとに　おかねを　わたしませう。（といつて代金を渡す。）

△ありがたうございます。

○わたくしは　いま　おかねを　わたしました。（渡す身振）

□さんは（みせの　ひとは）おかねをうけとりました。（受取る身振）

○みなさん、わたくしは　いま　みせのひとに　なにを　わたしましたか。

△おかねを　わたしました。

○みせの　ひとは　なにを　うけとりましたか。

△おかねを　うけとりました。
○わたくしは　いま　なにを　うけとりましたか。（鉛筆を受取つて）
△えんぴつを　うけとりました。
○みせの　ひとは　わたくしに　なにを　わたしましたか。
△えんぴつを　わたしました。
○みせの　ひとは　おかねを　うけとって　なんと　いひましたか。
△「ありがたうございます。」と　いひました。
店員をかへ、品物をかへて練習を行ふ。
本課の掛圖を掲げて（または本課の繪畫を見させて）
○これは　なんの　ゑですか。
△みせの　ゑです。
○この　みせは　なにを　うってゐますか。
△いろ〳〵な　ものを　うってゐます。
○さうです。いろ〳〵な　ものを　うってゐますね。ばうしを　うってゐますか。
△はい、（ばうしを）うってゐます。
○ほんを　うってゐますか。
△いゝえ、ほんは　うってゐません。
○これは　どこの　ひとですか。（店員を指して）
△みせの　ひとです。
○をとこのひとですか、をんなのひとですか。
△をんなのひとです。
○この　ひとは。（客を指して）
△をんなのひとです。
○この　をんなのひとは　みせの　ひとですか。（客を指して）

△いゝえ、さうではありません。
○この　ひとは　なにを　してゐますか。
△くつしたを　かってゐます。（指導者も和して）
○さうです。くつしたを　かってゐますね。
クツシタオ　カッテイマス
と板書し、繰返していふ。
△**クツシタオ　カッテイマス。**（一人々々に）
○くつしたが　たくさん　ありますね。
この　をんなのひとは　どの　くつしたを　かひますか。
△この　くつしたを　かひます。（繪畫中、客の指して）
○いま　なんと　いってゐるのでせうか。
「これは　いくらですか。」と　いってゐるのでせう。
□さん、いってごらんなさい。
△これは　いくらですか。（一人々々に）
○この　くつしたは　はちじふごせんです。
ハチジューゴセン
と書き、「いってごらんなさい。」といふ
△**ハチジューゴセン。**（一齊に、また一人一人に）
○では、みせの　ひとは　なんと　いってゐますか。
△「これは　はちじふごせんです。」と　いってゐます。
○をんなのひとは　なんと　いって　かひますか。
△「これを　ください。」と　いって　かひます。（指導者も和して、一人々々に）

○みなさん、この　をんなのひとは　みせの　ひとに　おかねを　いくら　わたしたでせうか。
△はちじふごせん　わたしました。（一人一人に）
○みせの　ひとは　なにを　うけとりましたか。
△おかねを　うけとりました。
○おかねを　いくら　うけとりましたか。
△はちじふごせん　うけとりました。
○この　をんなのひとは　なにを　うけとりましたか。
△くつしたを　うけとりました。
○くつしたを　うけとって　なにを　わたしましたか。
△おかねを　わたしました。
○みせの　ひとは　おかねを　うけとって　なんと　いひましたか。
△「ありがたうございます。」と　いひました。
○本を開かせて、符號をたどらせながらいふ。
△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）

3　總括

○この　をんなのひとは　なにを　してゐますか。（客を指して）
△くつしたを　かってゐます。
○これは　いくらですか。（靴下を指して）
△はちじふごせんです。
○なんと　いって　かひますか。
△「これを　（うって）ください。」と　いって　かひます。
○みせの　ひとは　をんなのひとに　なにを　わたしましたか。
△くつしたを　わたしました。

○をんなのひとは　みせの　ひとに　なにを　わたしましたか。
△おかねを　わたしました。
○みせの　ひとは　なにを　うけとりましたか。
△おかねを　うけとりました。
○をんなのひとは　なにを　うけとりましたか。
△くつしたを　うけとりました。

三　備考

(一)　買物遊び等によつて本課の會話を練習することは、適切有效な方法であらう。
(二)　「では」の意味は、いろ〳〵な用例を擧げてよく會得させる必要がある。
(三)　本課の繪畫は、一洋品店の光景である。客は男二人、女二人。店員は三名、いづれも白いエプロンを掛けてゐるが、その中の一人は出納係である。

第十一課（第十二頁）

一　教材

ヒツジガ　タクサン　イマ|マス。
チョード　ワタノ　カタマリノ　ヨ|ーデス。
ミンナ　クサオ　タ|ベテイマ〔ス〕。
イヌ|ガ　ソノ　マワリオ　アル|イテイマ〔ス〕。
アレワ　ヒツジノ　バ|ンオ　シテイル|ノデス。

構文

語彙　ヒツジ　チョード　ワタ　カタマリ　マワリ　バン
シテイル（ノデス）

符號

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前課が都市の商店に於ける會話であつたのから一轉して、本課は放牧の情景に取材した。悠々たる曠原に於て、心ゆたかに平和な放牧の羊群を見まもる情景を思ひ起させ、それについての話言葉を修得させるのが主眼である。

2　本課から第十三課に至る三課は、地文的教材である。連絡して指導するのが便宜であらう。

(二)　問答

1　復習

○□さん、あなたの　うちに　いぬが　ゐますか。
△はい　ゐます。（または「いゝえ、ゐません。」）
○あなたの　うちに　ねこが　ゐますか。
△はい、ゐます。（または「いゝえ、ゐません。」）
○あなたは　いぬと　ねこと　どちらが　おすきですか。
△わたくしは　いぬが　すきです。（または「ねこが　すきです。」）
○これは□なんですか。（掛圖または略畫

の羊を指して)

△ひつじです。

○あなたは　ひつじが　おすきですか。

△はい、ひつじが　すきです。(または、いいえ、すきではありません。)

○ひつじは　ひる　どこに　ゐますか。

△のはらに　ゐます。(指導者も和して、一人一人に)

○いぬは　よる　どこに　ゐますか。

△いへの　そとに　ゐます。(または、には　に　ゐます。)

○ねこは　どこに　ゐますか。

△いへの　なかに　ゐます。

2　提示

○本課の繪畫(掛圖)を見させて、みなさん、こゝは　どこですか。

△のはらです。

○さうです。ひろい　のはらですね。のはらに　なにが　ゐますか。

△ひつじが　ゐます。

○ほかに　なにが　ゐますか。

△いぬが　ゐます。

○いぬが　いくつ(いくひき)　ゐますか。

△ひとつ(いっぴき)　ゐます。

○ひつじが　たくさん　ゐますか、ひとつ(いっぴき)　ゐますか。

△たくさん　ゐます。

○ひつじは　なにを　してゐますか。

△くさを　たべてゐます。

○さうです。みんな　くさを　たべてゐますね。

いぬは　なにを　してゐますか。

△あるいてゐます。

○いぬが　どこを　あるいてゐますか。

△のはらを　あるいてゐます。

○いぬは　のはらの　どこを　あるいてゐますか。(犬の歩く方向を鞭で示し、羊のまはりに圓を描いて見せながら)

△ひつじの　まはりを　あるいてゐます。(指導者も和して、一人々々に)

○さうです。ひつじの　まはりを　あるいて　ひつじの　ばんを　してゐるのです。

○いぬは　ひつじの　まはりを　あるいて　なにを　してゐるのですか。

△ひつじの　ばんを　してゐるのです。

○黑板に

ヒツジノ　バンオ　シテイルノデス

と書き、繰返していふ。

△**ヒツジノ　バンオ　シテイルノデス。**

(一人一人に)

○ひろい　のはらに　しろい　ひつじが　たくさん　ゐます。なんの　やうですか。

△ゆきの　やうです。

○さうです。ゆきの　やうですね。これは　なんですか。(綿を示して)

△わたです。

○さうです。これは　わたです。(黑板に羊の恰好に綿の略畫をいくつも畫きながら)これは　なんですか。(その中の一つを指して)

△わたです。

○これは。

△わたです。

○これは　わたの　かたまりです。(略畫の綿の全部を指して)

これは　なんですか。
△わたの　かたまりです。
○これは　なんの　やうですか。
△ひつじの　やうです。
○さうです。ちゃうど　ひつじの　やうですね。
この　ひつじは　なんの　やうですか。
（羊を指して）
△ちゃうど　わたの　かたまりの　やうです。（指導者も和して、一人々々に）
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら繰返していふ。
△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）
（發音・抑揚を正しくいはせる。）
○これは　なんですか。（繪畫の雲を指して）
△くもです。（指導者も和して、一人々々に）

3　總括

○いぬは　よる　どこを　あるいてゐますか。
△いへの　まはりを　あるいてゐます。
○いへの　まはりを　あるいて　なにをしてゐるのですか。
△いへの　ばんを　してゐるのです。
○さうです。ねこは　いへの　ばんをしますか。
△いゝえ、ねこは　いへの　ばんを　しません。
○これは　なんですか。（前課の繪畫の店を指して）
△みせです。
○このひとは　なにを　してゐるのですか。
△みせの　ばんを　してゐるのです。

三　備　考

(一)「ちゃうど　わたの　かたまりの　やうです。」をよくわからせるためには、それぞれの教室で、その時その場合に最も適當した方法を工夫して指導する必要がある。

(二)　社會的題材から野外的題材に轉じた最初の課であるから、まづ野外氣分を喚起することが必要である。それには、掛圖の適當なのを利用することが有效と思はれるが、學習者の經驗の範圍でさういふ場所を指摘することができれば、一層效果的であらう。

第十二課　（第十三頁）

一　教材

ムギガ　キイロク　ナリマシタ。

ドコマデモ　キイロイ　ムギバタケガ　ツヅイテイマス。

カゼガ　フクト　ザワザワ　オトオ　タテマス。

トークニ　イエガ　ニサンゲン　ミエマス。

ソラニワ　スコシノ　クモモ　アリマセン。

構文

語彙　ムギ（ドコ）マデ　キイロイ　ムギバタケ　ツヅイテ　フク　ザワザワ　オト　タテ（マス）　トーク　ニサンゲン　ミエ（マス）　スコシ（ノ）　クモ

符號

〔教具〕掛圖。

二　指導

(一)　要領

1　前課が曠原に於ける放牧の情景であつたのに對して、本課は農耕の情景に取材した。輝かしい日光の下に、黄金の浪を立たせるゆたかな麥秋の情景を味はせ、それについての話言葉を修得させるのが主眼である。

2　本課の新語彙の中には、「ドコマデモ」「ツヅイテ」「オトオ　タテテ」のやうな、まぎれやすい意義の言葉があるから、特に用意のある指導を行ふ要がある。

(二)　問答

1　復習

前課の掛圖を掲げ示して、

○こゝは　どこですか。

△のはらです。

○なにが　ゐますか。

△ひつじと　いぬが　ゐます。

○ひつじが　なにを　してゐますか。

△くさを　たべてゐます。

○いぬが　どこを　あるいてゐますか。

△ひつじの　まはりを　あるいてゐます。

○なにを　してゐるのですか。
△ひつじの　ばんを　してゐるのです。
○ひつじが　たくさん　ゐますね。なんの　やうですか。
△ちやうど　わたの　かたまりの　やうです。
○そらに　くもが　ありますか。
△はい、(そらに)　くもが　あります。
○さうです。そらに　たくさん　くもが　ありますね。

2　提示

○みなさん、この　ゑを　ごらんなさい。(第十三頁の繪畫または掛圖を見させて)
そらに　くもが　ありますか。
△いゝえ、(そらに　くもが)　ありません。
○さうです。そらには　すこしの　くもも　ありません。
○そらには　たくさん　くもが　ありますか。
△いゝえ、(そらには)　すこしの　くもも　ありません。
○この　きいろい　ものは　なんですか。(一畦の麥を指して)
△むぎです。
○これは　なんですか。(前方の麥畠を指して)
△むぎばたけです。(指導者も和して、一人一人に)
○さうです。むぎばたけです。
これは　なんですか。(次の麥畠を指して)
△それも　むぎばたけです。
○さうです。これは　なんですか。(家の向側の麥畠を指して)

△それも　むぎばたけです。
○さうです。これも　むぎばたけです。
むぎばたけが　たくさん　つゞいてゐますね。(掛圖または略畫によつて麥畠のうち續いてゐる狀態を指し示しながら)
黑板に
ムギバタケガ　ツヅイテイマス
と書き、繰返していふ。
△**ムギバタケガ　ツヅイテイマス。**
○きいろい　むぎばたけが　どこまで　つゞいてゐますか。
△(きいろい　むぎばたけが)　どこまでも　つゞいてゐます。
(先づ指導者が、麥畠が繪畫の外まで續いてゐることを示しながらいひ、漸次それに倣つていはせる。)
○黑板に
ドコマデモ　キイロイ
と書き加へ、
ドコマデモ　キイロイ　ムギバタケガ　ツヅイテイマス。
と何遍もいふ。
△**ドコマデモ　キイロイ　ムギバタケガ　ツヅイテイマス。**
○とほくに　なにが　みえますか。(掛圖または繪畫の中の家を指して)
△いへが　みえます。
○とほくに　いへが　いくけん　みえますか。

△にけん(さんげん)　みえます。
○さうです。にさんげん　みえますね。
○いへの　そばに　なにが　みえますか。
△きが　みえます。
○(いへの　そばに)　いくほん　みえますか。
△(いへの　そばに)　たくさん　みえます。
○いへは　むぎばたけの　どこに　ありますか。
△(いへは)　むぎばたけの　なかに　あります。
○まどの　そとを　ごらんなさい。
△窓外を見る。
○いま　かぜが　ふいてゐますか、ふいてゐませんか。
△(かぜが)　ふいてゐます。(または、(かぜが)　ふいてゐません。)
○また　この　ゑを　ごらんなさい。かぜが　ふくと　むぎばたけは　どうなりますか。
○かぜが　ふくと　むぎばたけは　ざは　ざは　おとを　たてます。
○えんぴつで　つくゑを　たゝくと　こと　こと　おとを　たてます。(鉛筆の一端で、卓上を打ちながら)
○いしで　いしを　うつと　かち〳〵　おとを　たてます。(石で石を打ちながら)
○むぎばたけに　かぜが　ふくと　どんな　おとを　たてますか。
△(むぎばたけに　かぜが　ふくと)　ざは　ざは　おとを　たてます。
○きのはに　かぜが　ふくと　どんな　おとを　たてますか。

△ざは〳〵　おとを　たてます。
○黒板に
ザワザワ　オトオ　タテマス
と書き、繰返していふ。
△**ザワザワ　オトオ　タテマス。**(一人一人に)
○本の繪畫と符號を見させていふ。
△本の符號を見ていふ。(一人々々に)

3　總括

○まどの　そとを　ごらんなさい。そらには　たくさん　くもが　ありますか、ありませんか。
△そらには　すこしの　くもも　ありません。(または、そらには　すこし(たくさん)　くもが　あります。)
○そらは　どんな　いろですか。
△そらは　あをい　いろです。
○そらは　どこまで　つゞいてゐますか。
△(そらは)　どこまでも　つゞいてゐます。
○とほくに　なにが　みえますか。
△(とほくに)　いへ(いぬ)が　みえます。
○まどの　そばには　なにが　ありますか。
△(まどの　そばには)　きが　あります。
○かぜが　ふくと　どんな　おとを　たてますか。
△(かぜが　ふくと)　ざは〳〵　おとを　たてます。

三　備考

(一)　「どこまで」は一定の限度を求める言葉であるのに、「どこまでも」は限度のないことを示す言葉であることがわかりにくいであらう。身邊の事實に卽して會得させるほ

かはあるまい。

(二)「つゞいてゐます。」は、黑板に丸を數個竝べて書き、更に離れて數個書き、「これと　これとは　つゞいてゐます。」「これと　これとは　はなれてゐます。」と導き、「つゞいてゐます。」のわけを會得させればよいであらう。

(三)「とほくに」は「ちかくに」と對照し、事實に卽した用例をあげて覺らせるのがよいであらう。

第十三課（第十四・十五頁）

一　教材

オーキイ　カワガ　ナガレテイマス。

イロイロナ　フネガ　イッタリ　キタリシテイマス。

ムコーガワニ　アルノワ　コーバデス。

タカイ　エントツガ　ミエマス。

クロイ　ケムリガ　サカンニ　デテイマス。

構文

語彙　カワ　ナガレ(テ)　イッタリ　キ(タリ)　ムコーガワ

アル(ノワ)　コーバ　エントツ　クロイ　ケムリ

サカンニ

符號

〔教具〕　掛圖（都市の工場地帶を流れる川。できれば野外を流れる川も）。

二　指　導

(一)　要　領

1　前々課が牧野であり、前課が耕地であつたのを承けて、本課には河川を選び、河畔の一情景を題材とした話言葉を修得させようとした。

2　前々課・前課からだん〳〵形容詞や副詞が多く用ひられてゐる點に留意し、情景を如實に言表する能力を養成するのに適切な工夫を試みることが肝要である。

(二)　問　答

1　復習

第十一課及び第十二課の掛圖を竝べ揭げて、（または兩課の繪畫を比べさせて）

○こちらは　なんですか。（麥畠を指して）

△むぎばたけです。

○さうです。ひろい　むぎばたけです。

あちらは　なんですか。（牧野を指して）

△ひろい　のはらです。

○さうです。どんな　いろの　のはらですか。（牧野を指して）

△あをい　のはらです。

○こちらは　どうですか。（麥畠を指して）

△きいろい　むぎばたけです。

○さうです。きいろい　むぎばたけがどこまでも　つゞいてゐますね。（麥畠を遠くまで指しながら）

あちらは　どうですか。（牧野を指して）

△あをい　のはらが　どこまでも　つゞいてゐます。

○あちらには　なにが　ゐますか。（牧野を指して）

△ひつじが　ゐます。ひつじが　たくさん　ゐます。

いぬも　ゐます。

○こちらには　なにが　みえますか。（麥畠の繪畫を指して）

△いへが　にさんげん　みえます。

○あちらの　そらには　くもが　みえますか。（牧野の空を指して）

△（くもが）たくさん　みえます。

○こちらの　そらには　くもが　みえますか。（麥畠の空を指して）

△すこしの　くもも　みえません。

2　提示

○これは　なんですか。（あれば野外の川の掛圖を指して）

△これは　かはです。（指導者も和して、一人一人に）

○さうです。みづが　ながれてゐますね。

これは　なんですか。

△これも　かはです。

○さうです。やはり　みづが　ながれてゐますね。

この　かはの　みづは　どちらへ　な

がれてゐますか。
△(このかはの　みづは)　こちらへ　ながれてゐます。
○かはに　なにが　みえますか。
△ふねが　みえます。
○このふねは　どちらへ　いきますか。
△(このふねは)　あちらの　はうへ　いきます。
○あのふねは　どちらへ　いきますか。
△(あのふねは)　こちらの　はうへ　きます。
○このふねは　あちらの　はうへ　いきます。
あのふねは　こちらの　はうへ　きます。
ふねが　いったり　きたりしてゐますね。

○わたくしは　あそこへ　いきます。(一定の場所へ行く。)
わたくしは　こゝまで　きました。(もとの位置に歸つて)
わたくしは　あそこまで　いったりきたりしました。(數回往復して)
○ふねが　どうしてゐますか。
△ふねが　いったり　きたりしてゐます。
○黒板に
イッタリ　キタリシテイマス
と書き、何遍もいふ。
△**イッタリ　キタリシテイマス。**(一人一人に)
○これは　なんですか。
△ふねです。
○これは　なんですか。
△これも　ふねです。

○おほきい　ふねも　ちひさい　ふねもありますね。
○いろ〳〵な　ふねが　いったり　きたりしてゐますね。
かはの　うへには　なにが　ありますか。
△いろ〳〵な　ふねが　あります。
○いろ〳〵な　ふねが　どうしてゐますか。
△(いろ〳〵な　ふねが)　いったり　きたりしてゐます。
○これは　なんですか。
△えんとつです。(指導者も和して、一人一人に)
○これは　なんですか。
△それも　えんとつです。
○えんとつから　なにが　でてゐますか。

△けむりが　でてゐます。(指導者も和して、一人々々に)
○さうです。くろい　けむりが　でてゐます。
くろい　けむりが　すこし　でてゐますか、たくさん　でてゐますか。
△(くろい　けむりが)　たくさん　でてゐます。
○さうです。くろい　けむりが　さかんに　でてゐます。
えんとつから　くろい　けむりが　どんなに　でてゐますか。
△(えんとつから　くろい　けむりが)　さかんに　でてゐます。
○黒板に
クロイ　ケムリガ　サカンニ　デテイマス

と書き、何遍も繰返していふ。

△**クロイ　ケムリガ　サカンニ　デテイマス。**（一人々々に）

○えんとつが　たててあるのは　なんですか。

△こうばです。（指導者も和して、一人々々に）

○この　こうばは　どこに　ありますか。

△かはの　そばに　あります。

○さうです。かはの　そばに　あります。こうばは　かはの　こちらがはに　ありますか、むかふがはに　ありますか。

△（こうばは　かはの）むかふがはに　あります。

○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら繰返していふ。

△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）

3　總括

黒板に渡し場（次に行はれる問答中の要件を具へた）の略畫を畫いて、

○これは　なんですか。（川を指して）

△かはです。

○この　かはは　どちらの　はうへ　ながれてゐますか。

△あちらの　はうへ　ながれてゐます。

○これは　なんですか。（渡し舟を指して）

△ふねです。

○ふねが　いく（なん）さう　みえますか。

△いっさう　みえます。

○ふねは　どちらに　ありますか。むかふがはですか、こちらがはですか。

△むかふがはに　あります。

○むかふがはから　ひとが　くると　ふねは　どうしますか。

△こちらへ　きます。

○こちらから　ひとが　いくと　ふねは　どうしますか。

△むかふがはへ　いきます。

渡し舟の往復問答を數回繰返す。

○この　ふねは　この　かはを　どうしますか。

△（この　ふねは　この　かはを）いったり　きたりします。

○むかふがはに　あるのは　なんですか。

△こうばです。

○こうばには　なにが　たててありますか。（煙突を指して）

△えんとつが　たててあります。

○えんとつから　なにが　でてゐますか。

△なにも　でてゐません。

○えんとつから　なにが　でてゐますか。

（煙突に煙を少し畫き加へて）

△けむりが　すこし　でてゐます。

○えんとつから　なにが　でてゐますか。

（煙突から盛に黒煙が出てゐるところを畫き加へて）

△（えんとつから）けむりが　さかんに　でてゐます。

三　備考

(一)　工場については、共通經驗の工場を指摘し、または思ひ起させて指導する。

(二)　略畫は指導の途中で用ひ、繪畫についての問答を總括して行ふのも一方法である。

第十四課　（第十六・十七頁）

一　教材

キシャガ　テッキョーオ　トーッテイキマス。
ゴーゴート　オトオ　タテテ　ハシッテイマス。
コドモガ　カワノ　キシデ
「バンザイ。」
「バンザイ。」
ト　イッテイマス。
ワタクシワ　ガッコーデ　ナラッタ　キシャノ　ウタオ
ウタイマシタ。

構文

語彙　キシャ　テッキョー　ゴーゴー　キシ　バンザイ
イッテ　ナラッタ

符號

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前三課が地文的教材であつたのを承けて、本課から第十六課までの三課は、人文的教材特に汽車に關するものを掲げてゐる。さうして、まづ前課の川から本課の鐵橋へ、本課の鐵橋から次課の「汽車」の歌へと關聯してゐることに留意して指導するのが適切である。

2　鐵橋を音高く疾走する汽車、それに向かつて歡呼する兒童、さうして、思はず口に上る「汽車」の歌、さういふ情景を思ひ起させながら、それに關する話言葉を修得させるのが本課の主眼である。

(二)　問答

1　復習

前課の掛圖を掲げ示して、

○かはが　ながれてゐますか。
△はい、　おほきい　かはが　ながれてゐます。
○かはに　ふねが　どうしてゐますか。
△いったり　きたりしてゐます。
○むかふがはに　なにが　ありますか。
△こうばが　あります。
○こうばには　なにが　みえますか。
△たかい　えんとつが　みえます。
○えんとつから　なにが　でてゐますか。
△くろい　けむりが　さかんに　でてゐます。

第六課の掛圖を掲げ示して、(または本の繪畫を見させて)

○これは　なんですか。
△きしゃです。
○きしゃは　のはらを　とほっていきますか。
△はい、　のはらを　とほっていきます。
○かはを　とほっていきますか。
△はい、　かはを　とほっていきます。
○かはに　きしゃの　みちが　あります。
　それは　はしです。
○この　はしは　てつの　はしです。
　てつの　はしを　なんと　いひますか。

(自問)

　てっけうと　いひます。(自答)

○てっけう。(何遍も繰返していふ。)
△てっけう。(一齊に、また一人々々に)

2　提示

本課の掛圖を掲げ示して、(または本の繪畫を見させて)

○これは　なんですか。(鐵橋を指して)
△てっけうです。

○黒板に

テッキョー

と書き、繰返していふ。

△**テッキョー**。(一齊に、また一人々々に)
○きしゃが　いま　どこを　とほってゐますか。
△てっけうを　とほってゐます。
○どちらから　どちらの　はうへ　とほっていきますか。
△むかふがはから　こちらの　はうへ　とほっていきます。
○さうです。がうゝと　おとを　たてて　はしっていきます。
○きしゃは　しづかに　はしっていきますか、おとを　たてて　はしっていきますか。

△(がうゝと)　おとを　たてて　はしっていきます。

○きしゃの　えんとつは　どこに　ありますか。
△こゝに　あります。(煙突を指して)
○たかい　えんとつですか、ひくい　えんとつですか。
△ひくい　えんとつです。
○えんとつから　なにが　でてゐますか。
△くろい　けむりが　さかんに　でてゐます。
○きしゃは　いま　どこを　とほってゐますか。
△てっけうを　とほってゐます。
○てっけうの　したに　なにが　ながれてゐますか。
△かはが　ながれてゐます。
○こゝは　かはの　きしです。(岸を指し

て）

きし。（繰返していふ。）

△きし。（一齊に、また一人々々に）

○こゝは　どこですか。（岸を指して）

△かはの　きしです。

○かはの　きしに　なにが　ゐますか。

△こどもが　ゐます。

○いくにん　ゐますか。

△ひとり　ふたり　さんにん、さんにん　ゐます。

○こどもたちは　どこに　ゐますか。

△かはの　きしに　ゐます。

○こどもたちは　なにを　みてゐますか。

△きしゃを　みてゐます。

○さうです。きしゃを　みてゐます。

がう〳〵と　おとを　たてて　てっけうを　とほる　きしゃを　みてゐます。

きしゃを　みて「ばんざい。」と　いってゐます。

○ばんざい。（繰返していふ。雙手を擧げて。）

△ばんざい。（一齊に、また一人々々に）

○**バンザイ**

と書き、繰返していふ。

△**バンザイ**。（一人々々に）

○こどもたちは　なにを　みて「ばんざい。」と　いってゐますか。

△きしゃを　みて「ばんざい。」と　いってゐます。

○こどもたちは　どこで「ばんざい。」といってゐますか。

△かはの　きしで「ばんざい。」と　いってゐます。

○きしゃは　いま　どんな　おとを　たてて　はしってゐますか。

△がう〳〵と　おとを　たてて　はしってゐます。

○わたくしは　がくかうで　うたを　ならひました。

みなさんは　うたを　ならひましたか、ならひませんか。

△（うたを）ならひました。

○きしゃの　うたを　ならひましたか、ならひませんか。

△ならひません。

○わたくしは　がくかうで　きしゃの　うたを　ならひました。

いま　きしゃは　てっけうを　とほっていきますね。

「いまは　やまなか　いまは　はま、いまは　てっけう　わたるぞと……」

いま　わたくしは　なにを　うたひましたか。

△きしゃの　うたを　うたひました。

○なにを　みて　きしゃの　うたを　うたひましたか。

△きしゃの　ゑを　みて　きしゃの　うたを　うたひました。

○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながら繰返していふ。

△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）

3　總括

前課の掛圖を併せ掲げて、（または本の繪畫を見させて）

○これは　なんですか。（汽車を指して）

△きしゃです。

○これは。（舟を指して）

△ふねです。

○きしゃは　いま　どこを　とほってい

きますか。

△てっけうを　とほっていきます。

○てっけうの　うへを　はしってゐます　か、したを　はしってゐますか。

△(てっけうの)　うへを　はしってゐます。

○ふねは。

△(ふねは)　かはの　うへを　はしってゐます。

○きしゃは　しづかに　はしっていきますか。

△いゝえ、がう〳〵と　おとを　たてて　はしっていきます。

○ふねは　がう〳〵と　おとを　たてて　はしっていきますか。

△いゝえ、しづかに　はしっていきます。

○こどもたちは　きしゃを　みて　なんと　いってゐますか。

△「ばんざい。」と　いってゐます。

三　備　考

(一)　文中の「わたくし」は、畫中の子供ではなく、それを眺めてゐる「わたくし」である。

(二)　「ばんざい」の意味は、用例によつて會得させるほかはない。

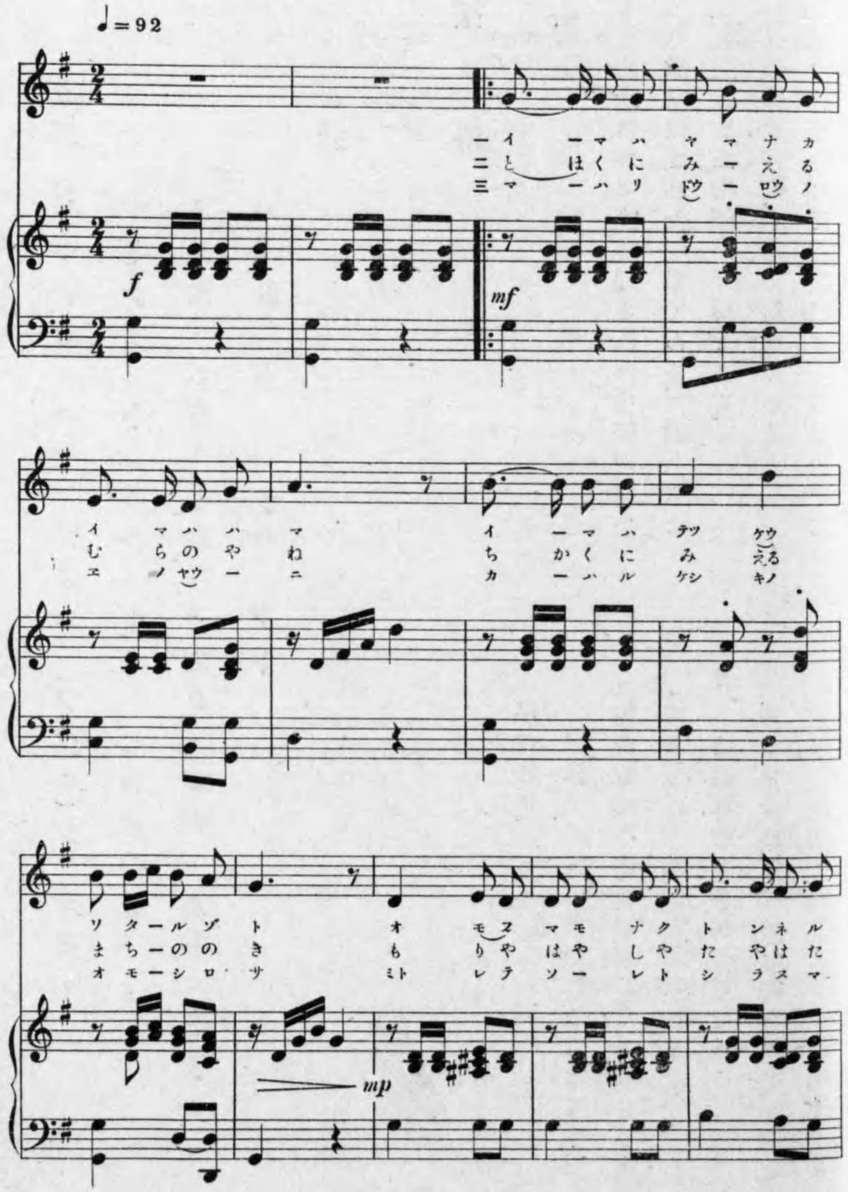
第十五課　（第十八・十九頁）

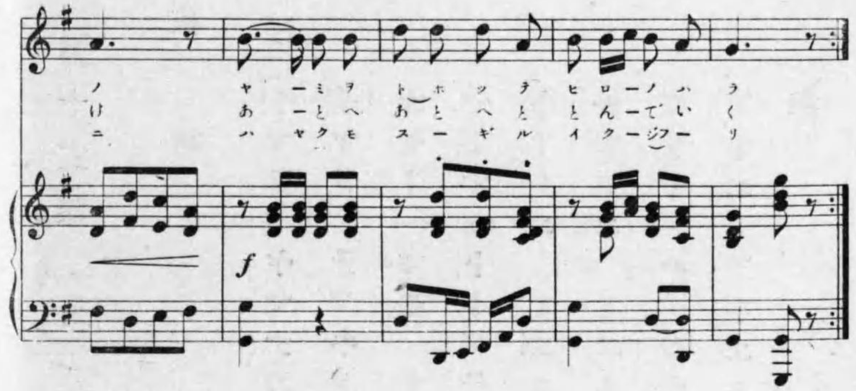
一　教　材

「イマワ　ヤマナカ、イマワ　ハマ、
イマワ　テッキョー　ワタルゾト、
オモー　マモ　ナク　トンネルノ
ヤミオ　トーッテ　ヒロノハラ。」
「トークニ　ミエル　ムラノ　ヤネ、
チカクニ　ミエル　マチノ　ノキ。
モリヤ　ハヤシヤ　タヤ　ハタケ、
アトエ　アトエト　トンデイク。」

構文

汽　車





汽　車

一、今は山中、今は濱、
今は鐵橋渡るぞと、
思ふ間もなく、トンネルの
闇を通つて廣野原。

二、遠くに見える村の屋根、
近くに見える町の軒。
森や林や田や畠。
後へ後へと飛んで行く。

三、廻り燈籠の畫のやうに
變る景色のおもしろさ。
見とれてそれと知らぬ間に
早くも過ぎる幾十里。

語彙　ヤマナカ　ハマ　ワタル（ワタル）ゾ　オモー
マモナク　トンネル　ヤミ　ヒロノハラ
ミエル　ムラ　ヤネ　チカク　マチ　ノキ　モリ
ハヤシ　タ　ハタケ　アト

符號

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前課に於て喚び起された感興の中から歌ひ出された唱歌である。歌ふことを主とした指導が肝要である。

唱歌教材は、本課が最初である。

2　本課は、特に反復歌誦による諳誦が主眼である。

韻律美が諳誦を助けるであらう。意味の理解の如きは、極めてあつさり扱つておくのが適切と思はれる。

3　曲譜は前頁所掲の通である。歌ひながら味はひ、味はひながら歌ひ、漸次その會得を深めてゆくやうに指導すべきである。

(二)　問答

1　復習

前課の掛圖を掲げ示して、

○このさんにんのこどもたちはなにをみてゐますか。

△きしゃをみてゐます。

○きしゃはどこをはしってゐますか。

△てっけうをはしってゐます。

○これはきしゃのなんですか。

△えんとつです。

○えんとつからなにがでてゐますか。

△けむりがさかんにでてゐます。

○きしゃはおとをたててはしってゐますか。

△はい、おほきいおとをたてはしってゐます。

○こどもたちはきしゃをみてなんといってゐますか。

△「ばんざい。」「ばんざい。」といってゐます。

2　提示

〔第一聯〕

本課の掛圖を掲げ示して、

○みなさん、このゑをごらんなさい。これはなんですか。（舟を指して）

△ふねです。

○これはうみですか、かはですか。（川を指して）

△かはです。

○これはうみですか、かはですか。（海を指して）

△うみです。

○さうです。うみです。ひろいうみである。

すね。
○これは　なんですか。(山を指して)
△やまです。
○これは　なんですか。(野原を指して)
△のはらです。
○きしゃは　いま　どこを　はしってゐ
ますか。
△てっけうを　はしってゐます。
○この　きしゃは　どこを　とほってき
ましたか。
△やまの　なかを　とほってきました。
○さうです。こゝは　やまの　なか、や
まなかですね。
きしゃは　それから　どこを　とほっ
てきたでせうか。
△はまを　とほってきました。
○さうです。いまは　どこを　とほって
ゐますか。
△てっけうを　とほってゐます。
○さうです。きしゃは　てっけうを　わたっ
ていきます。(渡る身振を伴なはせて)
こゝは　トンネルです。
きしゃは　てっけうを　わたって　ど
こへ　いきますか。
△トンネルへ　いきます。
○さうです。てっけうを　わたると　す
ぐ　トンネルの　なかへ　いきます。
○トンネルの　なかは　あかるいでせう
か。
△いゝえ、あかるくはありません。
○さうです。トンネルの　なかは　やみ
です。トンネルの　そとは　やみです
か。
△いゝえ、やみではありません。

○きしゃは　トンネルを　でると　どこ
へ　いきますか。
△のはらへ　いきます。
○のはらを　とほって　どこへ　いきま
すか。
△まちの　はうへ　いきます。(指導者も
和して)

(第　二　聯)

○こゝは　まちです。(掛圖の町を指して)
こゝは　むらです。(村を指して)
これは　いへの　やねです。(屋根を指
して)
これは　いへの　のきです。(軒を指し
て)
○こゝは　むらですか、まちですか。(町
を指して)
△まちです。
○こゝは　むらですか、まちですか。(村
を指して)
△むらです。
○これは　やねですか。(軒を指して)
△いゝえ、のきです。
○これは。(屋根を指して)
△やねです。
○これは　もりです。きが　たくさん
ありますね。
これは　はやしです。きが　たくさん
ありますね。
これは　たです。いねを　つくります。
これは　はたけです。むぎや　やさい
を　つくります。
○これは　たですか、はたけですか。(田
を指して)
△たです。

○これは　たですか、はたけですか。（畠を指して）
△はたけです。
○これは。（林を指して）
△はやしです。
○これは。（森を指して）
△もりです。
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながらいふ。（繰返して）
△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）

3　總括

○これは　きしゃです。（白墨や時計などを利用して）
きしゃは　いま　どこを　とほってゐますか。（掛圖の山中に汽車をおいて）
△（いま）やまの　なかを　とほってゐます。
○いまは　どこを　とほってゐますか。（濱に進めて）
△はまを　とほってゐます。
○いまは。（鐵橋に進めて）
△てっけうを　わたってゐます。
○てっけうを　わたると　むかふがはは　なんですか。
△トンネルです。
○さうです。「てっけうを　わたるぞと　おもふ　まも　なく」トンネルです。
トンネルの　なかは　どうですか。
△やみです。
○「てっけうを　わたるぞと　おもふ　まも　なく」どこを　とほっていきますか。
△トンネルの　やみを　とほっていきます。

○トンネルの　やみを　とほって　どこへ　いきますか。
△ひろい　のはらへ　いきます。
○きしゃの　まどから　とほくに　みえるのは　なんですか。（汽車から遠くの村の家の屋根を指して）
△むらの　やねです。
○さうです。むらの　いへの　やねです。ちかくに　みえるのは　なんですか。（町家の軒を指して）
△まちの　いへの　のきです。
○さうです。まちの　いへの　のきですね。
これは　なんですか。（森を指して）
△もりです。
○これは。（林を指して）
△はやしです。
○これは。（田を指して）
△たです。
○これは。（畠を指して）
△はたけです。
○きしゃは　まへへ　まへへと　はしっていきます。
もりや　はやしは　どう　みえますか。
△あとへ　あとへと　とんでいく　やうに　みえます。
○たや　はたけは。
△（たや　はたけも）あとへ　あとへと　とんでいく　やうに　みえます。
○本を開かせて符號をたどらせながら、第一・二聯をいふ。（繰返して）
△符號をたどりながら、第一・二聯をいふ。（一人々々に）
○みなさん、これは　なんの　うたです

か。

△きしゃの　うたです。

○さうです。きしゃの　うたです。

では、いっしょに　うたひませう。

三　備　考

(一)　第一聯は汽車の進行する場處の變化、第二聯は車窓からの眺望の變化で、それ〴〵汽車の速さを歌つてゐる。歌としての調子を調へるために省略せられてゐる言葉を會話で補つて意味を領得させ、諳誦なり歌誦なりを深く確かにしてゆくのが指導の要點である。

(二)　「ぞ」は强意の助詞である。例示によつて會得させるほかはないであらう。「もり」と「はやし」は嚴密には區別し難いけれども、ここでは、神社・佛閣などを中心として古木の茂つてゐるのを「もり」といひ、一般に樹木の群つてゐる處を「はやし」といふ程度でよいであらう。

(三)　この唱歌は三聯から成つてゐるものの中の第一・二聯である。

第十六課　（第二十・二十一頁）

一　教　材

ココワ　テーシャバデス。

ヒトガ　オーゼー　ナランデイマス。

アレワ　キシャニ　ノル　ヒトタチデス。

コチラデワ　マダ　キップオ　カッテイル　ヒトモアリマス。

キシャワ　モー　スグ　ツクデショー。

構文

語彙　テーシャバ　（コチラ）デワ　キップ　ツク

符號　プ

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　前課が汽車旅行の唱歌であつたのを承け、本課は停車場を題材とし、停車場の光景を敍する言葉を修得させるのが主眼である。

2　新出語彙も少く、構文もまた容易である。たゞ、實際に卽した會話として盛んに應用練習させ、その修得を確實にすることが肝要である。

(二)　問答

1　復習

前課の掛圖を掲げ示して、(または本の繪畫によつて)

○こゝは　なんですか。(畠を指して)

△はたけです。

○こゝは。(田を指して)

△たです。

なほ、「はやし」「もり」「まち」「むら」「のはら」「トンネル」「てっけう」「はま」「やま(の)なか」等について同樣練習を行ふ。

○きしゃは　いま　どこを　はしってゐますか。

△てっけうを　はしってゐます。

○はまを　とほってきましたか。

△はい、はまを　とほってきました。

○やまの　なかを　とほってきましたか。

△はい、やまの　なかを　とほってきました。

○きしゃは　すぐ　てっけうを　わたっていきますか。

△はい、すぐ　わたっていきます。

○てっけうを　わたって　どこへ　はいっていきますか。

△トンネルの　なかへ　はいっていきます。

○トンネルの　なかは　どうですか。

△やみです。

○きしゃは　トンネルの　やみの　なかを　とほっていきますか。

△はい、やみの　なかを　とほっていきます。

○トンネルの　やみを　とほって　どこへ　でますか。(野原を指して)

△のはらへ　でます。

○きしゃは　はやく　はしっていきます。まへへ　まへへと　とんでいきます。もりや　はやしは　どの　やうに　みえますか。

△あとへ　あとへと　とんでいく　やうに　みえます。

○むかふに　みえるのは　むらですか、まちですか。

△まちです。

○きしゃは　まちに　ちかくなりましたか、とほくなりましたか。

△まちに　ちかくなりました。

○まちには　ていしゃばが　あります。きしゃは　もう　すぐ　ていしゃばにつくでせう。

2　提示

本課の掛圖を掲げ示して(または本の繪畫によつて)

○こゝは　なんですか。

△ていしゃばです。(指導者も和して一齊に、また一人々々に)

○**テーシャバ**

と書き、繰返していふ。

△**テーシャバ**。(一人々々に)

○こゝは　どこですか。

△ていしゃばです。

○この　おほぜいの　ひとたちは　ていしゃばの　ひとたちですか、きしゃにのる　ひとたちですか。

△きしゃに　のる　ひとたちです。

○これは。(男の乘客を指して)

△をとこのひとです。

○これは。(女の乘客を指して)

△をんなのひとです。

○これは。(男の子を指して)

△をとこのこです。

○これは。(女の子を指して)

△をんなのこです。

○みんな　きしゃに　のる　ひとたちですか。

△はい、(みんな)　きしゃに　のる　ひとたちです。

○みんな　どうしてゐますか。

△(みんな)　ならんでゐます。

○こちらの　ひとも　きしゃに　のる　ひとたちですか。(切符を求めてゐる人人を指して)

△さうです。きしやに　のる　ひとたちです。

○こちらでは　いま　なにを　してゐるのでせうか。

きっぷを　かってゐるのでせうか。

△はい、きっぷを　かってゐるのです。

○**キップ**

と書き、繰返していふ。

△**キップ**。(一人々々に)

○この　ひとは　なにを　わたしましたか。

△おかねを　わたしました。

○なにを　うけとりましたか。

△きっぷを　うけとりました。

○ぺきんから　とうきゃうまでの　きしゃちんは　いくらでせうか。

△くじふにゑん　はっせん(たくさん)　かかります。

○△△から　○○までの　きしゃちんはにじっせんです。

では、○○から　△△までの　きしゃちんは　いくらでせうか。

△にじっせん　です。

○あの　おほぜいの　ひとたちは　きっぷを　かひましたか、かひませんか。

△(あの　ひとたちは)　きっぷを　かひました。

○この　ひとは　なにを　してゐますか。

△きっぷを　かってゐます。(一人々々に)

○さうです。まだ　きっぷを　かってゐる　ひとも　ありますね。

これは　きしゃに　のる　ひとですか、ていしゃばの　ひとですか。(驛員の一人を指して)

△ていしゃばの　ひとです。

○この　ひとは。(他の驛員を指して)

△ていしゃばの　ひとです。

○この　ていしゃばの　ひとは　なにを
　してゐますか。
△きっぷを　きってゐます。
○この　ひとは。
△○てを　あげてゐます。(指導者も和して
　一齊に、また一人々々に)
○きしゃは　もう　すぐ　ていしゃばに
　つくでせうか。
△はい、もう　すぐ　つくでせう。
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたど
　らせながらいふ。(繰返して)
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)

3　總括

停車場で下車客が改札口を出る略畫また
は掛圖を示して、
○こゝは　どこですか。
△ていしゃばです。
○きしゃが　ていしゃばに　つきました
　か、つきませんか。
△つきました。
○ひとが　おほぜい　ならんでゐますね。
　あれは　きしゃに　のる　ひとたちで
　すか、きしゃから　おりる　ひとたち
　ですか。(下車の人々を指して)
△きしゃから　おりる　ひとたちです。
○あちらには　まだ　のってゐる　ひと
　も　ありますか。(汽車を指して)
△はい、まだ　のってゐる　ひとも　あ
　ります。
○こちらには　まだ　きっぷを　かって
　ゐる　ひとも　ありますか。
△はい、まだ　きっぷを　かってゐる
　ひとも　あります。
○きしゃは　もう　すぐ　はしっていく

でせうか。
△はい、もう　すぐ　はしっていくでせ
　う。

本課の掛圖を掲げ示して、
○こゝは　どこですか。
△ていしゃばです。
○(ひとが)　おほぜい　ならんでゐますか。
△はい、(ひとが)　おほぜい　ならんでゐ
　ます。
○あれは　きしゃに　のる　ひとたちで
　すか、おりる　ひとたちですか。
△(きしゃに)　のる　ひとたちです。
○あちらでは　もう　きっぷを　きって
　ゐる　ひとも　あります。
　こちらでは。(切符賣場前の人を指して)
△(こちらでは)　まだ　きっぷを　かって
　ゐる　ひとも　あります。
○ていしゃばの　ひとは　いま　なにを
　してゐますか。(それ〴〵指して)
△きっぷを　きってゐます。
　てを　あげてゐます。
○きしゃは　もう　すぐ　つくでせうか。
△はい、もう　すぐ　つくでせう。

三　備　考

(一)　復習の場合、「汽車」の歌を歌はせるのも一方法である。

(二)　本課の繪畫は、着車間近い驛の光景である。一人の驛員は手を擧げて合圖をしてをり、他の一人の驛員は檢札中である。乘車券を既に求めた人々は、並んで檢札を受けてゐるが、まだ買はない二名は、今乘車券を求めてゐるところである。

(三)　本課の學習指導は、繪畫や掛圖で行ふや

うに計畫してみたが、土地の情況が許す限り、その土地の停車場についての問答を出發點として發展させ、停車場で行はれる會話を補つて學習させることが必要である。

第十七課　（第二十二―二十三頁）

一　教材

クロイ　クモガ　ソラ　イッパイニ　ヒロガリマシタ。

カゼガ　サット　フイテキマシタ。

アメガ　ポツポツ　フリハジメマシタ。

ピカリト　イナビカリガ　ヒカリマシタ。

カミナリガ　ゴロゴロ　ナリダシマシタ。

ユーダチワ　ダンダン　ヒドク　ナツテキマシタ。

構文

語彙　ヒロガリ(マシタ)　サット　フイテ　ポツポツ

フリハジメ(マシタ)　ピカリ　イナビカリ

ヒカリ(マシタ)　カミナリ　ゴロゴロ　ナリダシ(マシタ)
ユーダチ　ダンダン　ヒドク

符號

〔教具〕　掛圖(夕立時の天地を畫いたもの)。

二　指　導

(一)　要　領

1　前數課が地文・人文的教材であつたのを承け、本課と次課には天文的教材を掲げることとし、本課では、夕立の情景を味はせ、それについての話言葉を修得させるのを主眼としてゐる。

2　新出語彙が多く、且教材の性質上、いつぱいに「さつと」「ぱつ〳〵」「ぴかり」「ごろ〳〵」「だん〳〵」等副詞的修飾語が多い。これらの語によつて、その情景を的確に言表する話言葉の修得は、必ずや學習の興味を深からしめるであらう。

3　本課のやうな教材は、實景として捉へることは容易でないから、掛圖や繪畫によつて經驗を思ひ起させることが一般的な方法である。

(二)　問　答

1　復習

前課の復習を適當な方法・程度で行つた上、本課の豫備問答を行ふ。

○きのふは　あめが　ふりましたか。
△いゝえ、ふりませんでした。
○ゆうべは　あめが　ふりましたか。
△ゆうべも　ふりませんでした。
○ゆうべは　つきが　でましたか。
△はい、(つきが)　でました。
○どの　やうな　つきが　でましたか。
△まるい　おほきな　つきが　でました。
○どんなに　あかるい　つきよでしたか。
△ひるまの　やうに　あかるい　つきよでした。
○ほしも　たくさん　でてゐましたか。
△はい、(ほしも)　たくさん　でてゐました。
○そらは　きれいに　はれてゐましたか、くもつてゐましたか。
△きれいに　はれてゐました。

等、前日・前夜の天候について會話させる。

2　提示

本課の掛圖を掲げ示して、(または本の繪畫を見させて)

○これは　なんですか。(空を指して)
△そらです。
○これは。(雲を指して)
△くもです。
○どんな　くもですか。
△くろい　くもです。
○さうです。くろい　くもが　そら　いつぱいに　ひろがつてゐます。

くろい　くもが　どう　なってゐますか。
△そら　いっぱいに　ひろがってゐます。
○黒板に
イッパイニ
と書き、繰返していふ。
△**イッパイニ**。（一人々々に）
○これは　なんですか。
△あめです。
○さうです。あめが　ぽつ〳〵　ふってゐます。
○**ポツポツ**
と書き、繰返していふ。
△**ポツポツ**。（一人々々に）
○くもは。
△そら　いっぱいに　ひろがってゐます。
○あめは。
△ぽつ〳〵　ふってゐます。
○かぜは。
△ふいてゐます。
○さうです。かぜが　さっと　ふいてゐます。
○**サット**
と書き、繰返していふ。
△**サット**。（一人々々に）
○なにが　さっと　ふいてゐますか。
△かぜが　さっと　ふいてゐます。
○これは　いなびかりです。
いなびかりが　ぴかりと　ひかってゐます。
いなびかりが　どんなに　ひかってゐますか。
△ぴかりと　ひかってゐます。
○黒板に
ピカリト

と書き、繰返していふ。
△**ピカリト**。（一人々々に）
○なにが　ひかりましたか。
△いなびかりが　ひかりました。
○いなびかりが　どんなに　ひかりましたか。
△ぴかりと　ひかりました。
○くもの　なかで　かみなりが　なってゐます。
ごろ〳〵　ごろ〳〵　なってゐます。
なにが　なりだしましたか。
△かみなりが　なりだしました。
○かみなりが　どんな　おとを　たてて　なりだしましたか。
△ごろ〳〵（と　いふ　おとを　たてて）　なりだしました。
○**ゴロゴロ**
と書き、繰返していふ。
△**ゴロゴロ**。（一人々々に）
○あめは　さかんに　ふってゐます。
ゆふだちです。
ユーダチ
と書き、繰返していふ。
△**ユーダチ**。（一人々々に）
○なにが　さかんに　ふってゐますか。
△あめが　さかんに　ふってゐます。
○ゆふだちが　どう　なってきましたか。
△だん〳〵　ひどく　なってきました。
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながらいふ。（繰返して）
△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）
3　總括
○なにが　そら　いっぱいに　ひろがりましたか。

△くろい　くもが（そら　いっぱいに）ひろがりました。
○なにが　さっと　ふいてきましたか。
△かぜが　さっと　ふいてきました。
○なにが　ぽつ〳〵　ふりはじめましたか。
△あめが　ぽつ〳〵　ふりはじめました。
○なにが　ぴかりと　ひかりましたか。
△いなびかりが　ぴかりと　ひかりました。
○なにが　ごろ〳〵　なりだしましたか。
△かみなりが　ごろ〳〵　なりだしました。
○なにが　だん〳〵　ひどく　なってきましたか。
△ゆふだちが　だん〳〵　ひどく　なってきました。

三　備考

(一)　本課の學習指導には、掛圖の必要が特に大きい。眞に迫つた夕立時の天地を畫いた掛圖を用意して指導に着手すべきである。

(二)　符號をたどつて言表させる場合にも、主要な箇所、難解と思はれる箇所は、繪畫または掛圖を對照させながら學習させるのが適切な指導であらう。

第十八課　（第二十四・二十五頁）

一　教材

アメガ　ヤミマシタ。
ヒガ　テリダシマシタ。
トナリノ　ニワカラ　オトコノコト　オンナノコノ　コエガ
キコエテキマス。
「ニジガ　デマシタ。」
「ドコニ。」
「アソコニ。」
「アー、キレーデスネ。」
アカヤ　キイロヤ　ミドリヤ　アオヤ　ムラサキナド

ナナツノ　イロガ　ハッキリ　ミエマス。

構文

語彙　**テリダシ(マシタ)　ニワ　コエ　キコエ(テキマス)　ニジ**

アー　(デス)ネ　アカ　ミドリ　アオ　ムラサキ　ナド

ナナツ　イロ　ハッキリ

符號

〔教具〕

二　指　導

(一)　要　領

1　前課が夕立であつたのを承けて、本課には夕立後生じ易い虹を掲げ、虹の美しさとそれに卽した話言葉を修得させるのが主眼である。

2　「どこに　でましたか。」を「どこに。」と問ひ、「あそこに　でました。」を「あそこに。」と答へるのは、學習者の言表としては最初であるから、耳馴れてゐたはずの聽方と

關聯して、十分に會得して話させることが肝要である。

(二)　問　答

1　復習

前課の掛圖を掲げ示して、

○くろい　くもが　どこまで　ひろがりましたか。

△そら　いっぱいに　ひろがりました。

○かぜが　ふいてきましたか。

△はい、かぜが　さっと　ふいてきました。

○あめは。

△ぽつ〳〵　ふりはじめました。

○いなびかりは。

△ぴかりと　ひかりました。

○かみなりは。

△ごろ〳〵　なりだしました。

○かぜは　だん〳〵　どう　なってきましたか。

△だん〳〵　ひどく　なってきました。

○ゆふだちは。

△だん〳〵　ひどく　なってきました。

掛圖を納めて、

○もう　ゆふだちが　やみました。

いなびかりが　ひかりますか、ひかりませんか。

△もう　ひかりません。

○かみなりの　おとが　きこえますか、きこえませんか。

△もう　きこえません。

○かぜは　ひどく　ふいてゐますか、しづかに　ふいてゐますか。

△しづかに　ふいてゐます。

○そらが　だん〳〵　どう　なってきました。
△だん〳〵　あかるく　なってきました。
○もう　すぐ　はれるでせうか。
△もう　すぐ　はれるでせう。

2　提示

本課の掛圖を揭げ示して、(または本の繪畫を見させて)

○これは　なんですか。
　にじです。
○こゝは　どこですか。(空を指して)
△そらです。
○そらに　なにが　でましたか。(虹を指して)
△にじが　でました。
○にじが　どこに　でましたか。
△(にじが)　そらに　でました。

○さうです。にじは　きれいですね。
　にじは　どんな　いろですか。
△いろ〳〵な　いろが　あります。
○その　ひとつ〳〵を　いってごらんなさい。これは。
△あかです。(指導者も和して)
○これは。
△きいろです。(指導者も和して)
○これは。
△みどりです。(指導者も和して)
○これは。
△あをです。(指導者も和して)
○これは。
△むらさきです。(指導者も和して)
○さうです。みんなで　いくつの　いろが　みえますか。
△なゝつの　いろが　みえます。

○この　ふたりの　こどもは　なにを　みてゐますか。
△にじを　みてゐます。
○この　こどもは　なんと　いってゐるのでせう。
△「にじが　でました。」と　いってゐるのでせう。(指導者も和して)
○この　こどもは　なんと　いってゐるのでせう。
△「どこに　でましたか。」と　いってゐるのでせう。(指導者も和して)
○この　こどもは　なんと　いったでせうか。
△「あそこに。」と　(手を擧げて虹を指し)　いったでせう。(指導者も和して)
○さゝれた　にじを　みて　この　こどもは　なんと　いったでせうか。
△「あゝ、きれいですね。」と　いったでせう。(指導者も和して)
○この　こどもたちは　どこに　ゐるのですか。
△となりの　いへの　にはに　ゐるのです。
○どうして　わかったのでせう。
△こどもの　こゑが　きこえてきたのです。(指導者も和して)
○さうです。ふたりの　こゑは　となりの　にはから　きこえてきたのですね。
　となりの　にはから　なにが　きこえてきましたか。
△ふたりの　こどもの　こゑが　きこえてきました。
○本を開かせて繪畫を見させ、符號をたどらせながらいふ。(繰返して)

△符號をたどりながらいふ。（一人々々に）

3　總括

○ひどい　ゆふだちが　ありました。（前課の掛圖を示して）

いま　あめは　ふってゐますか、もう　やみましたか。

△もう　やみました。

○ひが　てりだしましたか、まだ　てりだしません　か。

△てりだしました。

○むかふの　そらに　なにが　でました　か。

△にじが　でました。

○となりの　にはから　こどもたちの　こゑが　きこえてきます。

だれの　こゑですか。

△をとこのこと　をんなのこの　こゑです。（またはにいさんと　いもうとの　こゑです。）

○その　こゑが　どこから　きこえてきます　か。

△となりの　にはから　きこえてきます。

○この　こどもは　なんと　いってゐます　か。

△「にじが　でました。」と　いってゐます。

○この　こどもは　なんと　いってゐます　か。

△「どこに。」と　いってゐます。

○この　こどもは。

△「あそこに。」と（虹を指して）いってゐます。

○この　こどもは。

△「あゝ、きれいですね。」と　いってゐます。

○さうです。にじは　きれいですね。

いくつの　いろが　みえますか。

△なゝつの　いろが　はっきり　みえます。

○□さん、その　いろを　ひとつ〳〵　いってごらんなさい。

△あかや　きいろや　みどりや　あをや　むらさきなどです。（一人々々に）

○さうです。よく　いへました。

三　備　考

(一)「てりだしました。」については、あめが　ふりだしました。はなが　さきだしました。みづが　ながれだしました。かねが　なりだしました。ひとが　あるきだしました。等の事例を練習し、「○○だしました。」の領得を確かにしたい。

(二)「いろ」については、スペクトルを使用して、それ〴〵の言葉の會得をはかるのも適當な方法である。

(三)「など」については、先づ机上にインキ・ペン・筆・墨・白墨等をおき、はじめは「○○や　○○や……　○○が　あります。」の形で練習し、次に「○○や　○○などが　あります。」の形で練習することによつて會得させるのが適當な指導であらう。

第十九課　（第二十六・二十七・二十八頁）

一　教材

タローサント　ユキコサンガ　デンワアソビオ　シテイマス。
ユキコサンガ　オイシャサマニ　デンワオ　カケテイマス。
タローサンガ　オイシャサマデス。
「モシモシ、サイトーセンセーデスカ。」
「ハイ、ソーデス。」
「ワタクシワ　タナカデス。　コドモガ　カゼオ　ヒキマシタ。
ミテクダサイ。」
「ネツワ　アリマスカ。」
「サンジューハチド　アリマス。」
「ソレデワ　スグ　マイリマス。」
「ドーゾ　オネガイシマス。　サヨーナラ。」
「サヨーナラ。」

構文

語彙　タローサン　デンワアソビ　オイシャサマ　デンワ
カケ(テイマス)　モシモシ　サイトー(センセー)　カゼ(感
冒)　ヒキ(マシタ)　ミテ(診テ)　ネツ　サンジューハチド
ソレデワ　ドーゾ　オネガイ(シマス)

符號

〔教具〕繪畫に示したやうな玩具の電話。

二　指導

(一) 要領

1　前課が社會生活や地理的事項を主とした教材であつたのから轉じて、本課以下三課は、兒童生活に取材し、本課には電話遊びを掲げた。

2　本課は、電話遊びの興味を喚起させ、それに關する話言葉を修得させるのが主眼である。

3　教材の前半は敍述、後半は會話である。會話は、本課の繪畫のやうな電話を作らせて練習させるのが有效な指導の方法であらう。

(二) 問答

1　復習

○けふは　どなたが　やすんでゐますか。

△□さんが　やすんでゐます。

○□さんは　どうしたのでせう。

△□さんは　ごびやうきです。

○この　をんなのこは　どうしたのでせうか。(中の卷、第四十七課の掛圖を掲げ示し、病んでゐる女の子を指して)

△びやうきです。

○この　をんなのこは　どなたですか。(見舞つてゐる女の子を指して)

△おともだちです。

○いま　なんと　いつてゐるのでせうか。

△「ごびやうきは　いかゞですか。」と　いつてゐます。

○この　をんなのこは　なんと　いつてゐるのでせうか。

△「ありがたうございます。たいへん　よく　なりました。」と　いつてゐます。

○さうです。さう　いつてゐるのです。

2　提示

○これは　なんですか。(玩具の電話を示して)

△でんわです。(指導者も和して、一人々々に)

○さうです。おもちやの　でんわです。

□さん、わたくしの　でんわを　きいてごらんなさい。(片方を渡して)

もし〳〵、□さんですか。

△はい、さうです。

○わたくしの　ことばが　きこえますか。

△はい、きこえます。

○こんどは　○○さんと　かはつてください。

△はい、すぐ　かはります。

○○○さんですか。

△はい、○○です。

○あなたは　いま　どこに　ゐますか。

△いま　がくかうに　ゐます。

○がくかうで　なにを　してゐますか。

△につぽんごを　ならつてゐます。

○その他。

△○その他。

○みなさん、この　ゑを　ごらんなさい。(本課の掛圖を掲げ示して)

なにを　してゐますか。

△でんわを　かけてゐます。

○さうです。おもちやの　でんわを　かけてゐます。

でんわあそびを　してゐるのです。

○**デンワアソビ**

と書き、繰返していふ。

△**デンワアソビ**。(一齊に、また一人々々に)

○この　をんなのこは　ゆきこさんです。

この　をとこのこは　たらうさんです。

ゆきこさんは　なにを　してゐますか。
△たらうさんに　でんわを　かけてゐます。
○たらうさんは　なにを　してゐますか。
△ゆきこさんの　でんわを　きいてゐます。
○いま　だれが　でんわを　かけてゐますか。
△ゆきこさんが　(でんわを)　かけてゐます。
○だれが　でんわを　きいてゐますか。
△たらうさんが　(でんわを)　きいてゐます。
○たらうさんと　ゆきこさんが　なにを　してゐますか。
△でんわあそびを　してゐます。
○たらうさんは　いま　おいしゃさまになりました。
たらうさんは　おいしゃさまです。
さいとうせんせいです。
○たらうさんは　いま　なにに　なりましたか。
△おいしゃさまに　なりました。
○**オイシャサマ**
と書き、繰返していふ。
△**オイシャサマ**。(一齊に、また一人々々に)
○おいしゃさまは　どなたですか。
△さいとうせんせいです。
○では、ゆきこさんは　どなたに　でんわを　かけてゐるのですか。
△おいしゃさまに　(でんわを)　かけてゐるのです。
○おいしゃさまは　どなたですか。
△さいとうせんせいです。

○これは　なんですか。
△にんぎゃうです。
○ゆきこさんは　いま　にんぎゃうの　おかあさんに　なりました。
これは　どなたの　こどもですか。
△ゆきこさんの　こどもです。
○この　こどもの　おかあさんは　どなたですか。
△ゆきこさんです。
○ゆきこさんは　なんと　いって　でんわを　かけてゐるのでせうか。
ほんの　にじふしちページを　ごらんなさい。
「モシモシ、サイトーセンセーデスカ。」
「ハイ、ソーデス。」「ワタクシワ　タナカデス。コドモガ　カゼオ　ヒキマシタ。ミテクダサイ。」「ネツワ　アリマスカ。」
「サンジューハチド　アリマス。」「ソレデワ　スグ　マイリマス。」「ドーゾ　オネガイシマス。サヨーナラ。」「サヨーナラ。」
(符號を辿りながら、電話らしくいふ。)
○ゆきこさんが　なんと　いって　でんわを　かけてゐますか。
△「もし〳〵、さいとうせんせいですか。」
○さうです。おいしゃさまは　なんと　へんじを　しましたか。
△「はい、さうです。」
○ゆきこさんは　なんと　いひましたか。
△「わたくしは　たなかです。こどもが　かぜを　ひきました。みてください。」
○さうです。ゆきこさんは　おにんぎゃうの　おかあさんですね。
こどもが　びゃうきに　なったのですね。どうしましたか。

△かぜを　ひきました。
○さうです。
　かぜを　ひくと　どう　なりますか。
△あたまが　いたみます。
○かぜを　ひくと　ねつが　でますか。
△はい、(ねつが)　でます。
○この　こどもの　ねつは　なんど　あ
　りますか。
△さんじふはちど　あります。
○なぜ　ねつが　でたのでせう。
△かぜを　ひいたからです。
○おいしゃさまが　なんと　いひました
　か。
△「それでは　すぐ　まゐります。」
○この　こどもの　おかあさんは　なん
　と　いひましたか。
△「どうぞ　おねがひします。」

○黒板に
　ドーゾ　オネガイシマス
　と書き、繰返していふ。
△**ドーゾ　オネガイシマス。**(一人々々に)
○本を開かせ第二十八頁の繪畫を見させ
　て、
　これは　どなたですか。
△おいしゃさまです。
○なんと　いふ　おいしゃさまですか。
△さいとうせんせいと　いふ　おいしゃ
　さまです。
○さいとうせんせいが　どこへ　でかけ
　ますか。
△その　こどもの　うちへ　でかけます。
○その　こどもの　うちは　なんと　い
　ひますか。
△たなかさんと　いひます。

○本の符號をたどらせながら「**タローサンワ　オイシャサマデス。**」までを繰返して
　いふ。
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)
○符號をたどらせながら、その次から終ま
　でをいふ。(繰返して)
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)

3　總括

○たらうさんと　ゆきこさんが　いま
　なにを　してゐますか。
△でんわあそびを　してゐます。
○たらうさんが　なにに　なりましたか。
△おいしゃさまに　なりました。
○なんと　いふ　おいしゃさまですか。
△さいとうせんせいです。
○ゆきこさんは　なにに　なりましたか。
△おかあさんに　なりました。

○おかあさんは　なんと　いひますか。
△たなかさんです。
○たなかさんの　うちでは　どなたが
　びゃうきに　なりましたか。
△こどもが　びゃうきに　なりました。
○どんな　びゃうきですか。
△かぜです。
○おかあさんは　いま　なにを　してゐ
　ますか。
△おいしゃさまに　でんわを　かけてゐ
　ます。
○□さん、こゝへ　おいでなさい。
　○○さん、こゝへ　おいでなさい。
　□さんは　おいしゃさまに　おなり
　なさい。○○さんは　おかあさんに
　おなりなさい。
　でんわあそびを　おはじめなさい。

△電話をまねて會話。

三　備　考

(一)　既習の「こども」は子供一般を指してゐたが、本課の「こども」は「わが子」を指してゐる。また、「みてください。」の「みる」は、既習の「見る」「眺める」「讀む」等の「みる」とは違つて、「診察する」意味の「みる」である。かういふやうな意味の擴張については、特に明確な用法を示すことが必要である。

(二)　「それでは」は、既習の「では」と連絡して適當な事例で修得させ、「どうぞ」は、日常の用例を思ひ起させて修得を確實にすべきである。

(三)　この類の教材は、玩具を用ひて、樂しく會話の練習をするところに主眼があるのであるから、機に臨んで適當な會話を試みた上、教材の會話を修得させることが適當な指導法であらう。尙、繪畫について「ふとん」「まくら」「くすり」「くすりびん」「ばうし」「かばん」等の語を補充し、または復習することも必要な指導の一面である。

第二十課　（第二十九・三十頁）

一　教　材

ゴブサタシマシタ。

ミナサン　オカワリワ　アリマセンカ。

チョーカコーニ　イル　オジガ　ワタクシノ　ウチエ

マイリマス。

オヒマデシタラ　アサッテノ　バン　オイデクダサイ。

モーコノ　メズラシイ　ハナシオ　キキマショー。

構文。

語彙　ゴブサタ　オカワリ　チョーカコー　オジ　オヒマ

(デシ)タラ　アサッテ　バン　モーコ　メズラシイ

キキ(マショー)

符號

〔教具〕葉書・封書等。

二　指　導

(一)　要　領

1　前課が會話の一形態としての電話言葉であつたのを承けて、本課は會話の一發展としての通信言葉を修得させるのが主眼である。

2　通信文そのものを修得させるのが主眼ではなく、會話そのまゝが通信文になることを知らせ、その通信文を中心とした話言葉の修得を行はせようとする課であることはいふまでもない。

3　この教材が含んでゐる挨拶と用件との區別が、はつきりするやうに指導することが必要である。

(二)　問　答

1　復習

○これは　なんですか。(葉書を示して)

△はがきです。

○この　はがきは　どなたに　だすのですか。(葉書の宛名を示して)

△□さんに　だすのです。

○□さんは　どこに　ゐますか。(葉書の宛名を示して)

△○○に　ゐます。

封書(てがみ)を示して同様に練習を行ふ。

○この　はがきは　どなたから　きましたか。(通信せられた葉書を示して)

△□さんから　きました。

○どなたへ　きましたか。

△せんせい(○○さん)へ　きました。

○こちらには　なにが　かいてありますか。(葉書の通信欄を示して)

△いろ〳〵な　ことが　かいてあります。

封書についても同様に練習を行ふ。

○□さん、あなたは　はがき(てがみ)を　だした、ことが　ありますか。(「だした」身振をして、一人々々に)

△はい、あります。(または「いゝえ、ありません。」)

○どなたに　だしましたか。

△ともだち(○○さん)に　だしました。

2　提示

○これは　わたくしの　をぢです。(「をぢ」らしい人を黒板に畫いて)

いま　もうこに　ゐます。(地圖を掲げて蒙古地方を指し)　あなたの　をぢさんは　どこに　ゐますか。

△○○に　ゐます。

○その　をぢさんは　おとうさんの　きやうだいですか、おかあさんの　きやうだいですか。

△おとうさんの(または「おかあさんの」)　きやうだいです。

○わたくしの　この　をぢは　わたくしの　おとうさんの　おとうとです。いま、もうこの　ちやうかこうに　ゐます。

（地圖で張家口を指して）
○黑板に
モーコノ　チョーカコー
と書き、繰返していふ。
△**モーコノ　チョーカコー**。（一人々々に）
○その　ちゃうかこうに　ゐる　をぢが　あさっての　ばん　わたくしの　うちへ　まゐります。
わたくしは　この　をぢから　もうこの　はなしを　きく　ことが　できます。
○あなたも　おいでに　なりませんか。
△はい、ありがたうございます。
○この　ゑを　ごらんなさい。
これは　なんでせうか。
△わかりません。
○これは　もうこの　いへです。めづらしい　いへですね。みた　ことが　ありますか。
△いゝえ、まだ　みた　ことが　ありません。
○それでは、あさっての　ばん　もうこの　めづらしい　はなしを　きゝませう。
○○の　○○さんも　よんであげませう。
○○さんへ　はがきを　かいてくださいませんか。
△はい、なんと　かきませうか。
○本の符號をたどらせながら、繰返していふ。
△符號をたどりながらいふ。
○あなたは　いま　なにを　してゐますか。

△にっぽんごを　ならってゐます。
○では、おひまですか、おひまではありませんか。
△ひまではありません。（指導者も和して）
○あした　てんきでしたら　さんぽを　しませう。
△はい、てんきでしたら　さんぽを　しませう。
○あした　あめふりでしたら　さんぽを　やめませう。
△はい、（あめふりでしたら　さんぽを）やめませう。
○もう　いちど　いってごらんなさい。
△符號をたどつていふ。
○はじめの「ごぶさたしました。みなさん　おかはりは　ありませんか。」は　あいさつの　ことばです。
いってごらんなさい。
△符號をたどつていふ。
○この　ゑを　ごらんなさい。これが　その　はがきです。どなたか　よめますか。
△いゝえ、よめません。
○まだ　よめませんが　だん〳〵　よめる　やうに　なります。
3　總括
○この　はがきは　どなたに　だすのですか。
△○○の　○○さんへ　だすのです。
○はじめに　なんと　かきましたか。
△「ごぶさたしました。
みなさん　おかはりは　ありませんか。」
○さうです。はじめに　あいさつが　かいてあります。その　つぎに　なんと

かいてありますか。

△「ちゃうかこうに　ゐる　をぢが　わたくしの　うちへ　まゐります。おひまでしたら、あさっての　ばんおいでください。

もうこの　めづらしい　はなしを　きませう。」

○さうです。

もうこの　めづらしい　はなしを　いつ　きくのですか。

△あさっての　ばんです。

○どなたから　もうこの　めづらしいはなしを　きくのですか。

△せんせい(あなた)の　をぢさんから　きくのです。

○さうです。わたくしの　をぢは　どこに　ゐますか。

△もうこの　ちゃうかこうに　ゐます。

○どこで　きくのですか。

△あなた(せんせい)の　うちで　きくのです。

○わたくしの　をぢは　どこから　どこへ　まゐりますか。

△ちゃうかこうから　あなた(せんせい)のうちへ　まゐります。

○さうです。もう　いちど　いってごらんなさい。

三　備　考

(一)　「ごぶさたしました。みなさん　おかはりは　ありませんか。」といふ挨拶言葉は、意味を十分會得させることが困難であらう。たゞどういふ場合に使はれる挨拶言葉であるかをわからせるだけに止め、だんだんその意味をわからせることに努めるほかはないであらう。

(二)　前課で修得した「まゐります。」は「行きます。」の意であり、本課の「まゐります。」は「來ます。」の意であることに注意して指導する必要がある。

(三)　本課は通信を中心にした會話の練習で、通信文そのものを授けるのが主眼ではない。

第二十一課　（第三十一・三十二・三十三頁）

一　教材

ユーガタニ　ナリマシタ。

ニシノ　ソラガ　マッカデス。

コドモガ　ユーヤケノ　ウタオ　ウタッテイマス。

「ユーヤケ　コヤケデ　ヒガ　クレテ、

ヤマノ　オテラノ　カネガ　ナル。

オテテ　ツナイデ　ミナ　カエロー。

カラスト　イッショニ　カエリマショー。」

「コドモガ　カエッタ　アトカラワ、

マルイ　オーキナ　オツキサマ。

コトリガ　ユメオ　ミル　コロワ、

ソラニワ　キラキラ　キンノ　ホシ。」

アシタモ　キット　イイ　テンキデショー。

構文

語彙　ニシ　マッカ　ユーヤケ　コヤケ　オテラ　カネ

ナル　オテテ　ツナイデ　ミナ　カエロー　カラス

カエッタ　オーキナ　オツキサマ　ユメ　コロ

キラキラ　キン　キット

符號

〔教具〕

二　指導

(一)　要　領

1　夕燒の情景を思ひ起させ、それについての話言葉を修得させるとともに、「夕燒小燒」の歌を漸次諳誦に導くのが本課の主眼である。

2　本課の教材は敍述と歌とから成り、敍述の中に歌を挿んでゐる構成である。歌の部分は「汽車」の歌のやうに、たゞ歌誦せしむべき教材であつて、一々理解させることは困難であらう。大體の意味が想像されゝばよいことにしなくてはならない。

3　掛圖なり、繪畫なりによつて夕燒の實景を思ひ起させることが、指導上肝要である。

(二)　問　答

1　復習

○けふの　てんきは　どうですか。
△たいへん　いゝ　てんきです。
○そらは　くもつてゐますか、はれてゐますか。
△よく　はれてゐます。
○かぜが　ふいてゐますか、ふいてゐませんか。
△かぜが　ふいてゐます。（當日の天候に應じて）
○そらに　つきが・でてゐますか。
△いいえ、でてゐません。
○ほしが　でてゐますか。
△いゝえ、でてゐません。
○すこしも　でてゐませんか。

△はい、すこしも　でてゐません。
○いまは　ばんですか、ひるまですか。
△（いまは）　ひるまです。
○では、ひは　どこに　みえますか。
△あそこに　みえます。（日を指して）
○ひは　だん〳〵　どちらの　はうへ　いきますか。
△にしの　はうへ　いきます。
○ひは　どこへ　はいりますか。
△にしの　はうへ　はいります。（西の方を指して）

2　提示

本課の掛圖を掲げ示して、（または本の繪畫を見させて）

○この　ゑを　ごらんなさい。これは　ゆふがたの　けしきです。
○そらが　どう　みえますか。
△あかく　みえます。
○さうです。にしの　そらが　まつかですね。

黑板に

マッカデス

と書き、繰返していふ。

△**マッカデス**。（一人々々に）
○まつかな　ゆふやけです。
　あしたも　いゝ　てんきでせうか。
△あしたも　いゝ　てんきでせう。
○あしたも　きつと　いゝ　てんきでせうか。
△（あしたも）　きつと　いゝ　てんきでせう。
○「きつと」といひながら

キット

と書き、「きつと　いゝ　てんきでせう。」と

繰返していふ。
△きっと　いゝ　てんきでせう。
○こどもたちが　ゐますね。(畫中の子供等を指して)
これは。(姉を指して)
△ねえさんです。
○これは。(弟を指して)
△おとうとです。
○ねえさんと　おとうとは　なにを　みてゐますか。
△ゆふやけを　みてゐます。
○うたを　うたってゐますね。
なんの　うたを　うたってゐるのでせうか。
△ゆふやけの　うたを　うたってゐるのでせう。
○ゆふやけの　うたを　うたってみませうか。(符號をたどらせて)
ユーヤケ　コヤケデ　ヒガ　クレテ、
ヤマノ　オテラノ　カネガ　ナル。
オテテ　ツナイデ　ミナ　カエロー。
カラスト　イッショニ　カエリマショー。
(言葉がはつきりするやうに、曲節を和げて、半ば話をするやうにいふ。)
△第一聯をいふ。(指導者も和し、符號をたどつて)
○これは　なんの　ゑですか。(第三十二頁の繪畫を見させて)
△ゆふやけの　ゑです。
○これは　なんですか。
△やまです。
○これは　なんですか。
△きです。

○これは　なんですか。
△いへです。
○さうです。おてらです。これは　なんですか。
△とりです。
○なんと　いふ　とりですか。
△からすです。(指導者も和して)
○これは　なんですか。(鐘を指して)
△かねです。(指導者も和して)
○この　かねは　いつ　なりますか。
△ゆふがた　なります。
○ゆふがた　だけですか。
△あさも　ばんも　なります。
○どんな　おとを　たてて　なりますか。
△ぼーん　ぼーんと　なります。(指導者も和して)
○からすは　なんと　いって　とんでいきますか。
△かあ　かあと　いって　とんでいきます。(指導者も和して)
○からすは　どこへ　いくのでせう。
△からすの　うちへ　かへるのでせう。
(指導者も和して)
○もう　いちど　うたってごらんなさい。
△第一聯をいふ。(指導者も和し、符號をたどつて)
○もう　ひとつ　あります。うたってみませう。
コドモガ　カエッタ　アトカラワ、
マルイ　オーキナ　オツキサマ。
コトリガ　ユメオ　ミル　コロワ、
ソラニワ　キラキラ　キンノ　ホシ。
(言葉をはつきりさせ、半ば歌、半ば話のやうに、調子よく、しかもわかり易くい

夕燒小燒

中村雨紅作歌

一、夕燒小燒で日が暮れて、
山のお寺の鐘がなる。
お手手つないで皆歸らう。
烏と一しよにかへりませう。

二、子供が歸つた後からは、
圓い大きなお月さま。
小鳥が夢をみる頃は、
空にはきらきら金の星。

夕燒小燒

草川信作曲

♩= 84

mf　ユフヤケコヤケデ
こどもがかへつた

pp　p　mf

8va bass.

ヒガクレタ　ヤマノオテラノカネガナ
あとからは　まるいおほきなおつきさ

f　ルマ　オーテテツナイデミナカヘラウ
こどもがゆめをーみるころは

f

ふ。

△第二聯をいふ。（指導者も和し、符號をたどつて）

○これは　なんですか。（繪畫または掛圖を見させて）

△ことりです。

○ことりは　なにを　してゐますか。

△ことりは　ねむってゐます。（指導者も和して）

○これは　なんですか。

△ほしです。

○さうです。ほしです。ほしが　きらきら　ひかってゐますね。もう　いちどうたってみませう。

△第二聯をいふ。（指導者も和し、符號をたどつて）

○本を開かせ符號をたどらせながら、ゆつくりと第一・二聯を歌ふ。

△一人々々いふ。（符號をたどりながら）

3　總括

○ゆふやけを　みた　ことが　ありますか。

△はい、あります。

○ゆふやけの　ときは　にしの　そらが　どう　なりますか。

△まっかに　なります。

○この　きも　あかく　みえますか。（第三十二頁の繪畫を指して）

△はい、あかく　みえます。

○この　うちは。（鐘樓を指して）

△その　うちも　あかく　みえます。

○この　こどもたちは。（第三十一頁の繪畫を指して）

△その　こどもたちも　あかく　みえます。

○みんな　あかく　みえますね。

　そらは。

△まっかです。

○たいへん　きれいですね。

　あしたも　いゝ　てんきでせうか。

△はい、あしたも　いゝ　てんきでせう。

○あしたも　きっと　いゝ　てんきでせうか。

△はい、（あしたも）きっと　いゝ　てんきでせう。

○この　こどもたちは　なにを　うたってゐるのですか。（第三十一頁の繪畫を指して）

△ゆふやけの　うたを　うたってゐるのです。

○では、いっしょに　ゆふやけの　うたを　うたひませう。

三　備　考

(一)「夕燒小燒」の歌の意味を理解させるよりも、「夕燒小燒」の歌が歌はれる場合を理解させることを眼目とした話言葉の學習を指導すべきである。本課の指導案が、歌の意味に關しては或程度まで觸れ、困難と思はれる部分には觸れないのは、以上のやうな趣意によるのである。

(二)「夕燒小燒」の歌の意味は、今後繰返し練習する度に次第に會得させていくべきで、ここで全部を學習させることは困難と思はれる。たゞどんな場合の歌かがわかればよいとしなくてはなるまい。

(三)　オツキサマはオツキサマともいふ。

第二十二課　（第三十四・三十五頁）

一　教材

コノ　シャシンオ　ゴランナサイ。
コレワ　フジサンデス。
マッシロナ　ユキオ　イタダイテ　クモノ　ウエニ
ソビエテイマス。
ナント　ユウ　リッパナ　ヤマデショー。
フジサンワ　セカイイチノ　ヤマデス。

構文

語彙　シャシン　フジサン　マッシロ　イタダイ(テ)
ソビエ(テ)　リッパ　セカイイチ

符號

〔教具〕

二　指導

(一)　要領

1　秀麗な富士山の寫眞によつてその偉觀に觸れさせ、それに關する話言葉を修得させるのが本課の主眼である。

2　日本の自然美を示す一代表として、中の卷〔さくら〕と相並んだ教材である。寫眞を直接教材として、これに關係ある會話や問答を試み、その中へこの教材を織りこむことが指導の要領である。

(二)　問答

1　復習

○これは　なんの　ゑですか。（第三頁の繪畫を見させて）
△たいさうを　してゐる　ゑです。
○これは　なんの　ゑですか。（第七頁の繪畫を見させて）
△なはとびを　してゐる　ゑです。
○これは。（第三十頁の繪畫を見させて）
△もうこの　いへの　ゑです。
○これは　もうこの　いへの　しゃしんです。
しゃしん。（繰返して）

△しゃしん。(一齊に、また一人々々に)
○これは　なんの　ゑですか。(黑板に指導者自身の略畫を畫いて)
△それは　せんせいの　ゑです。
○これは。(指導者の寫眞を揭げ示して)
△それは　せんせいの　しゃしんです。
(指導者も和して)
○これは　なん(どなた)の　しゃしんですか。(次々にいろ〳〵な寫眞を示して)
△それは　○○の　しゃしんです。
○これは　ゑですか、しゃしんですか。
(櫻花の咲いてゐる寫眞を示して)
△それは　しゃしんです。
○なんの　しゃしんですか。
△さくらのはなの　しゃしんです。

2　提示

○みなさん、これを　ごらんなさい。(本の繪畫を示し、學習者各自によく見させる。)
○これは　なんの　しゃしんですか。
△ふじさんの　しゃしんです。
○**フジサンノ　シャシン**
と書き、繰返していふ。
△**フジサンノ　シャシン**。(一齊に、また一人一人に)
○これは　なんですか。(寫眞中の雲を指して)
△くもです。
○くもが　とほくまで　つゞいてゐますか、つゞいてゐませんか。
△(くもが)　とほくまで　つゞいてゐます。
○ふじさんの　あたまは　どこに　みえますか。(山巔を指して)
△(ふじさんの　あたまは)　くもの　うへに　みえます。
○さうです。ふじさんは　くもの　うへに　そびえてゐます。(聳立してゐるといふ身振をして)
ふじさんは　くもの　うへに　どうしてゐますか。
△くもの　うへに　そびえてゐます。
○どの　やまよりも　たかい　やまは　どれですか。(四方の山々を指して)
△ふじさんです。
○たいへん　たかい　やまですね。
やまの　あたまには　なにが　みえますか。
△まっしろな　ゆきが　みえます。
○**マッシロナ　ユキ**
と書き、繰返していふ。
△**マッシロナ　ユキ**。(一人々々に)
○あの　ゆきは　なつ　きえますか、なつでも　きえませんか。
△なつでも　きえません。
○ふじさんは　まっしろな　ゆきを　いたゞいてゐます。(いたゞいてゐます。といふ身振をして)
□さん、いってごらんなさい。
△ふじさんは　まっしろな　ゆきを　いたゞいてゐます。
○ふじさんは　なにを　いたゞいてゐますか。
△まっしろな　ゆきを　いたゞいてゐます。
○ふじさんは　まっしろな　ゆきを　いたゞいて　くもの　うへに　そびえてゐます。
△ふじさんは　まっしろな　ゆきを　い

たゞいて　くもの　うへに　そびえてゐます。

○りっぱな　やまですね。

りっぱな　やま。(繰返して)

△りっぱな　やま。(一人々々に)

○**リッパナ　ヤマ**

と書き、繰返していふ。

△**リッパナ　ヤマ**。(一人々々に。その他、りつぱな家、りつぱな人等實物乃至掛圖等によつて會話を行ひ、「りっぱ」といふ言葉の意味を領得させる。)

○どちらの　はうが　りっぱな　やまですか。(繪畫の他の山と富士山とを指して)

△ふじさんの　はうが　りっぱな　やまです。

○どちらの　はうが　りっぱな　やまですか。(他の山の畫かれてゐる掛圖と比較させて)

△ふじさんの　はうが　りっぱな　やまです。(一人々々に)

○さうですね。

ふじさんは　たいへん　りっぱです。

なんと　いふ　りっぱな　やまでせう。

△なんと　いふ　りっぱな　やまでせう。

○ふじさんの　やうな　りっぱな　やまが　ほかに　ありますか。

△(ふじさんの　やうな　りっぱな　やまは)　ほかに　ありません。

○では、ふじさんは　にっぽんいちの　やまですか。

△はい、ふじさんは　にっぽんいちの　やまです。

○ふじさんは　せかいいちの　やまでせうか。(「せかいいち」といふ身振を伴なはせて)

△はい、ふじさんは　せかいいちの　やまです。

○**セカイイチノ　ヤマ**

と書き、繰返していふ。

△**セカイイチノ　ヤマ**。(一人々々に)

○ふじさんの　したの　はうに　みえるのは　なんですか。(湖を指して)

これは　こすゐです。

△こすゐです。

○本の符號をたどらせながらいふ。(繰返して)

△本の符號をたどりながらいふ。(一人一人に)

3　總括

○爛漫たる櫻花の繪畫と富士山の寫眞とを掲げ示して、

これは　なにと　なにですか。

△さくらの　ゑと　ふじさんの　しゃしんです。(指導者も和して)

○ふじさんは　なにを　いたゞいてゐますか。

△まっしろな　ゆきを　いたゞいてゐます。

○くもの　うへに　どうしてゐますか。

△くもの　うへに　そびえてゐます。

○この　しゃしんを　ごらんなさい。なんと　いふ　りっぱな　やまでせう。

この　ゑを　ごらんなさい。

これは。(答を待つ身振)

△なんと　いふ　りっぱな　はな(さくら)でせう。

三　備　考

(一)「いたゞいて」「そびえて」等の言葉は、意味の領得が困難であらう。指導上特に工夫を要する。

(二)「復習」では、本課教材の豫備的復習だけについて記したが、いふまでもなく、既習前課については適當に立案して復習さすべきである。

(三)本課の寫眞は、根を遠く諸方に張つて、高く雲際に屹立する富士山の偉容(寫眞)である。上巻の口繪(ふじさん)をも併せ用ひるのが便宜であらう。

第二十三課　(第三十六・三十七頁)

一　教　材

アチラノ　ウチニモ　コチラノ　ウチニモ
ヒノマルノハタガ　ヒラヒラシテイマス。(1)
ミチオ　トール　ヒトタチワ
「オメデトーゴザイマス。」
「オメデトーゴザイマス。」
ト　イッテイマス。
イヌモ　ウレシソーニ　トビマワッテイマス。(1)
キョーワ　オショーガツデス。

構文

語彙　アチラ　ヒノマルノハタ　ヒラヒラ　(ヒト)タチ
オメデトーゴザイマス　ウレシソー　トビマワッテ
オショーガツ

符號

〔教具〕

二　指　導

(一)　要　領

1　年中行事の一つである年始の情景について話方を練習し、その挨拶を修得させるのが主眼である。

2　「おめでたうございます。」は、年始の挨拶としては勿論、その他一般吉事・慶事に於ける挨拶言葉である。それ〴〵の事例に卽して練習し、その修得を確かにすべきである。

(二)　問　答

1　復習

○けふは　どんな　てんきですか。
△ゆきが　ふりはじめました。
○のはらや　はたけが　まっしろに　みえますか。
△(のはらや　はたけが)　まっしろに　みえます。
○もりや　はやしは。(答を待つ身振)
△もりや　はやしも　まっしろに　みえます。
○いまは　あきですか。
△いゝえ、あきではありません。
○では、いつですか。
△ふゆです。
○ゆきの　ふる　さむい　ふゆが　いくと　なにが　きますか。(身振を伴なはせて)
△はるが　きます。
○はるは　いろ〳〵な　はなが　さきますね。
その　はるが　いくと。(答を待つ身振)
△なつが　きます。
○あつい　なつが　きますね。
なつが　いくと。(答を待つ身振)
△あきが　きます。
○きのはが　きいろく　なりますね。
あきが　いくと。(答を待つ身振)
△ふゆが　きます。
○さうです。
いまは　いつですか。
△ふゆです。
○なんぐわつですか。
△じふにぐわつです。
○じふにぐわつから　なんぐわつに　なりますか。
△いちぐわつに　なります。
○さうですね。いちぐわつに　なります。
おしやうぐわつです。

おしゃうぐわつ。（繰返して）

△おしゃうぐわつ。（一齊に、また一人々々に）

○いちねんは　なんぐわつから　はじまりますか。

△（いちねんは）おしゃうぐわつから　はじまります。

○いまは　じふにぐわつですね。

おしゃうぐわつは　もう　すぐ　まゐります。

いふまでもなく、以上の會話は、學習の時期・天候等に應じて適當に行はるべきである。

2　提示

○本課の掛圖を掲げ示して（または本を開かせ繪畫を見させて）、

これは　しゃしんですか、ゑですか。

△これは　ゑです。

○なんの　ゑでせうか。

△おしゃうぐわつの　ゑです。

○さうです。おしゃうぐわつの　ゑです（松飾を指しながら）

オショーガツ

と書き、繰返していふ。

△**オショーガツ**。（一齊に、また一人々々に）

○おしゃうぐわつに　なりました。

こちらにも　あちらにも（それ〴〵指して）ひら〳〵してゐるのは　なんですか。（「ひら〳〵してゐる」身振をしながら）

△にっぽんの　こくきです。

○さうです。にっぽんの　こくきです。

にっぽんの　こくきは　ひのまるのはたです。

ひのまるのはた。（繰返して）

△ひのまるのはた。（一齊に、また一人々々に）

○**ヒノマルノハタガ　ヒラヒラシテイマス**

と書き、繰返していふ。

△**ヒノマルノハタガ　ヒラヒラシテイマス**。（一人々々に）

○ひのまるのはたが　どこに　ひら〳〵してゐますか。

△どの　いへにも　ひら〳〵してゐます。

○こちらの　うちにも　ひら〳〵してゐますか。（「こちらの　うち」を指して）

△こちらの　うちにも　ひら〳〵してゐます。

○あちらの　うちには　どうですか。（「あちらの　うち」を指して）

△あちらの　うちにも　ひら〳〵してゐます。

○なにが　ひら〳〵してゐますか。

△ひのまるのはたが　ひら〳〵してゐます。

○みちを　とほる　ひとたちは　あちらでも　こちらでも　ごあいさつを　してゐます。（それ〴〵指して）

なんの　ごあいさつを　してゐるのでせうか。

△おしゃうぐわつの　ごあいさつを　してゐるのでせう。（指導者も和して）

○さうです。おしゃうぐわつの　ごあいさつを　してゐるのです。

にこ〳〵して　ごあいさつを　してゐますね。（畫を指して）

なんと　ごあいさつを　してゐるのでせうか。

△「おめでたうございます。」(指導者も和して一齊に、また一人々々に)
○こちらの　ひとが　なんと　ごあいさつを　しますか。(「こちらの　ひと」を指して)
△「おめでたうございます。」(一人々々に)
○あちらの　ひとが　なんと　ごあいさつを　しますか。(「あちらの　ひと」を指して)
△おめでたうございます。
○**オメデトーゴザイマス**
と書き、繰返していふ。
△**オメデトーゴザイマス。**(一人々々に)
○この　ひとは　どんな　かほを　してゐますか。
△にこ〳〵してゐます。
○この　ひとは　どんな　かほを　してゐますか。
△にこ〳〵してゐます。
○どの　ひとも　にこ〳〵してゐますか。
△(どの　ひとも)　みんな　にこ〳〵してゐます。
○みんな　うれしさうに　みえますね。
うれしさうに　みえませんか。(畫中の人々を指して)
△いゝえ、みんな　うれしさうに　みえます。
○いぬも　うれしさうに　みえますか。
△はい、いぬも　うれしさうに　みえます。
○うれしさうに　とびまはってゐますか。
(「とびまはる」身振を伴なはせて)
△うれしさうに　とびまはってゐます。
○**ウレシソーニ　トビマワッテイマス**

と書き、繰返していふ。
△一人々々いふ、繰返して。
○本を開かせ繪畫を見させて、符號をたどらせながら繰返していふ。
△符號をたどりながらいふ。(一人々々に)

3　總括

○みなさん、いちねんは　いつから　はじまりますか。
△(いちねんは)　おしゃうぐゎつから　はじまります。
○おしゃうぐゎつに　なると　あなたのとしは　いくつに　なりますか。(一人一人に)
△△△に　なります。
○おしゃうぐゎつには　なんと　ごあいさつを　しますか。
△「おめでたうございます。」(一齊に、また一人一人に)
○わたくしには　なんと　ごあいさつを　しますか。
△「せんせい、おめでたうございます。」(一人一人に)
○わたくしは　みなさんに　なんと　ごあいさつを　しますか。
△「みなさん、おめでたう。」(指導者も和して一齊に、また一人々々に)
○おとうさんには　なんと　ごあいさつを　しますか。
△「おとうさん、おめでたうございます。」(一人々々に)
次第に、母・祖父・祖母・兄・姉・叔父などについて同樣に練習を行ふ。
○おとうとには。(答を待つ身振)
△「おめでたう。」(一人々々に)

妹についても同様に練習を行ふ。

學友について練習を行ふときは、「おめでたう。」「おめでたうございます。」いづれを用ひても差支へない。

三　備　考

(一)　「復習」で、前課の復習事項の記載を省略したが、これは當然適當に立案して練習さすべきである。

(二)　教材中「キョーワ　オショーガツデス。」の「オショーガツ」は、正月松の内の一日と解してよい。

(三)　「おめでたうございます。」は目上の人に、「おめでたう。」は目下の者乃至同輩間に用ひられる挨拶である。それ〴〵の事例によつてその用法を領得さすべきである。

(四)　なほ第二十課の通信についての學習と連絡して、賀狀についての練習を行ふのもよいであらう。

(五)　この指導案は、學習が正月以前に行はれるといふ假定のもとに立案されてゐる。實際學習の時期によつて適當に工夫すべきであることはいふまでもない。

(六)　本課の繪畫は、正月松の内の光景である。松飾等の飾物に注意させる必要がある。二組の人々が新年の挨拶を交してをり、一匹の犬が嬉しさうにそのまはりを飛廻つてゐるところである。

第二十四課　（第三十八・三十九・四十頁）

一　教　材

オンナノコガ　ハネオ　ツイテイマス。
ミンナ　キレーナ　キモノオ　キテイマス。
ムコーデワ　オトコノコガ　タコオ　アゲテイマス。
「タコ　タコ　アガレ。
カゼ　ヨク　ウケテ、
クモマデ　アガレ、
テンマデ　アガレ。」
「エダコニ　ジダコ、
ドチラモ　マケズ

クモマデ　アガレ、
テンマデ　アガレ。」
「アレ　アレ　サガル。
ヒケ　ヒケ　イトオ。
アレ　アレ　アガル。
ハナスナ　イトオ。」

構文

語彙　ハネ　ツイ(テ)　キモノ　キ(テ)　ムコー　アゲ(テ)
アガレ　ウケ(テ)　テン　エダコ　ジダコ　マケ(ズ)
アレ　サガル　ヒケ　イト　ハナス(ナ)

符號

〔教具〕　掛圖・羽子・羽子板・紙鳶一二種。

二　指導

(一)　要領

1　前課に聯關して、季節の遊戯、追羽子・紙鳶揚げ等についての話言葉を修得させ、「紙鳶の歌」を語誦させるのが主眼である。

2　「紙鳶の歌」は、既習の「汽車」「夕燒小燒」の歌に續く韻文教材である。韻文として讀誦するとともに、歌曲をも教へて歌はせ、習熟につれてその意味を理解させてゆくのが適當な指導方法である。

3　紙鳶揚げは日支共通の遊戯であるが、紙鳶の形や模樣にはそれ〴〵の特色がある。實物なり、繪畫なりによつてそれを示すことが必要である。

追羽子は日本特有の遊戯であるから、特に繪畫や實物で説明することが必要である。

(二)　問答

1　復習

○本を開かせ前課の繪畫を見させて、(または前課の掛圖を揭げ示して)

これは　なんの　ゑ(エ)ですか。

△おしゃうぐわつ(ショーガ)の　ゑです。

○この　ひとたちは　なにを(オ)　してゐま(イ)すか。

△おしゃうぐわつの　ごあいさつを　してゐます。

○なんと　いって　ごあいさつを　してゐますか。

△「おめでたうございます。」(一齊に、また一人一人に)
○この　ひとは。(支那服の人を指して。答を待つ身振)
△「おめでたうございます。」(一齊に)
○この　ひとは。(洋服の人を指して。答を待つ身振)
△「おめでたうございます。」(一齊に)
○あちらの　ひとたちは。(遠くに見える男女の人々を指して)
△「おめでたうございます。」(一齊に)
○さうです。「おめでたうございます。」といってゐるのです。
どの　ひとも　きれいな　きものをきてゐますね。(畫中の人々の服を指して。着てゐるといふ身振)
きれいな　きもの。(服を指し、繰返して)
△きれいな　きもの。(一齊に、また一人一人に)
○きれいな　きものを　きてゐます。(着用の身振。繰返して)
△きれいな　きものを　きてゐます。
○みんな　うれしさうに　みえますね。
△はい、みんな　うれしさうに　みえます。
○いぬは。(答を待つ身振)
△いぬも　うれしさうに　みえます。
○さうです。いぬは　どうしてゐますか。
△うれしさうに　とびまはってゐます。
○これは　なんですか。
△ひのまるのはたです。
○これは。
△それも　ひのまるのはたです。
○あちらの　うちにも　こちらの　うちにも　ひのまるのはたが　ひら〳〵してゐますね。

2　提示

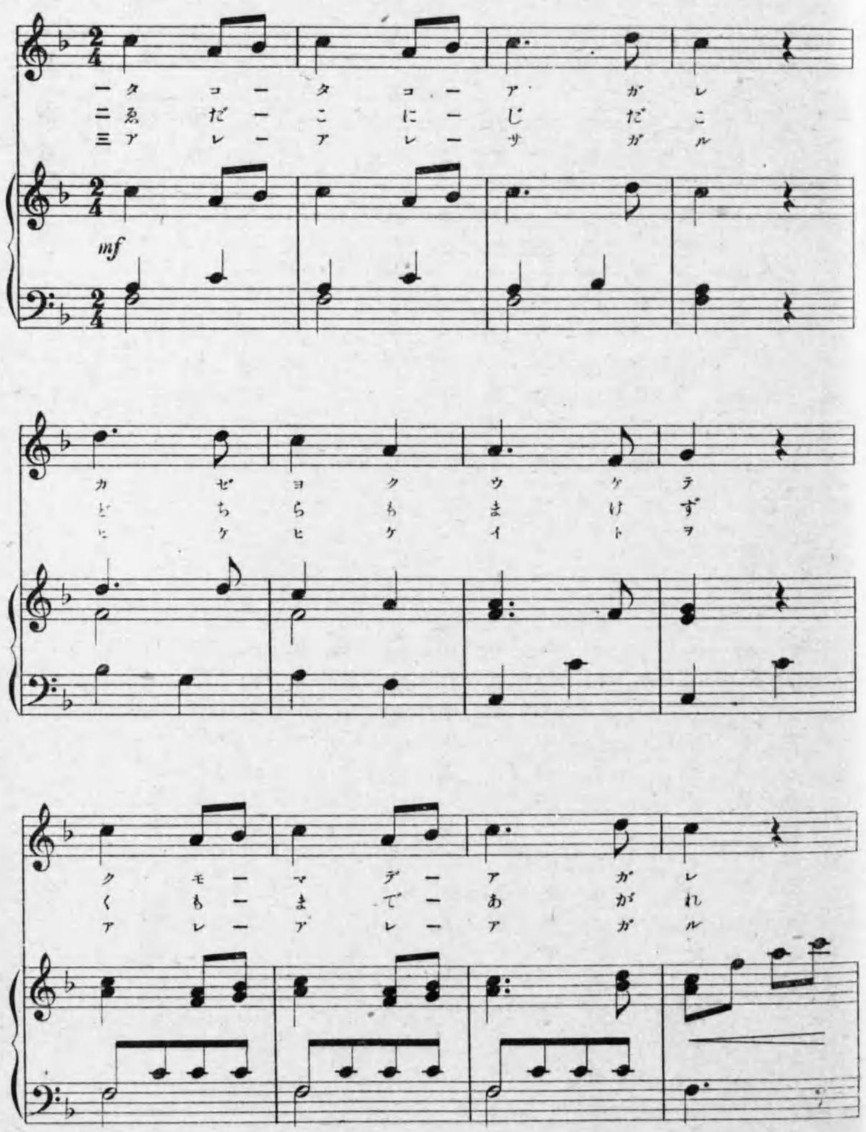
本課の掛圖を掲げ示して、(または本の繪畫を見させて)
○をとこのこや　をんなのこが　あそんでゐます。
こちらの　こどもは。(女の子たちを指して)
△をんなのこです。
○あちらの　こどもは。(男の子たちを指して)
△をとこのこです。
○たかく　あがってゐるのは　なんですか。(紙鳶を指して)
△たこです。(指導者も和して)
○たこ。
△たこ。
○これは。
△それも　たこです。
○をんなのこは　いくにん　ゐますか。
△ひとり　ふたり　さんにん、さんにんゐます。
○この　ひと(をんなのこ)たちは　いまなにを　してゐますか。(自問)
はねを　ついてゐます。(自答)
これは　はねです。(羽子を示して)
これは　はごいたです。(羽子板を示して)
かうして　つくのです。(羽子と羽子板とを示し、ついて見せながら、一つ二つと數へさせる。)
○をんなのこは　なにを　してゐますか。
△はねを　ついてゐます。

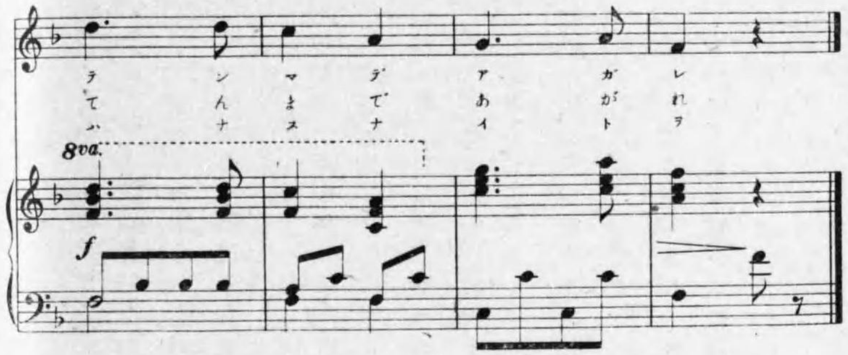
○どの　こどもが　はねを　ついてゐますか。
△この　こどもと　この　こどもが（はねを）ついてゐます。（追羽子をしてゐる兩人を指して）
○この　ひとは　なにを　してゐますか。（控へて立つ一人を指して）
△みてゐます。
○むかふの　をとこのこは　なにを　してゐますか。
△たこを　あげてゐます。
○たこが　たかく　あがってゐますね。
△はい、（たこが）たかく　あがってゐます。（一人々々に）
○これは　なんですか。（紙鳶の絲を指して自問）
たこの　いとです。（自答）
○これは　なんですか。（紙鳶の絲を指して）
△たこの　いとです。
○これは　ゑだこです。（繪紙鳶を指して）
ゑが　かいてある　たこです。
これは　じだこです。（字紙鳶を指して）
じが　かいてある　たこです。
○これは　じだこですか、ゑだこですか。（字紙鳶を指して）
△じだこです。
○これは。（繪紙鳶を指して）
△ゑだこです。
○たこが　いくつ　あがってゐますか。（繪畫の紙鳶を指して）
△ひとつ　ふたつ　みっつ、みっつ　あがってゐます。
○じたこは　どれですか。

△これです。（字紙鳶を指して）
○ゑだこは　どれですか。
△これです。（繪紙鳶を指して）
○いちばん　たかく　あがってゐるのは　どれですか。（第三十九頁の繪畫を指して）
△みんな　おなじ　やうに　たかく　あがってゐます。
○みんな　おなじ　やうに　たかく　あがってゐますか。（第四十頁の繪畫を示して）
△いいえ、みんな　おなじ　やうに　たかく　あがってゐません。
○この　たこと、あの　たことは　どうですか。（繪紙鳶と字紙鳶を指して）
△おなじ　やうに　たかく　あがってゐます。
○この　たこは　さがってゐます。（奴紙鳶を指して）
いま　この　たこは　あがってゐますか、さがってゐますか。
△さがってゐます。
○この　こどもは　うたを　うたって　たこを　あげてゐます。
その　うたを　うたってみませう。
○**タコ　タコ　アガレ。**
カゼ　ヨク　ウケテ、
クモ　マデ　アガレ、
テンマデ　アガレ。
いっしよに　うたってごらんなさい。
タコ　タコ　アガレ。
△**タコ　タコ　アガレ。**
○**カゼヨク　ウケテ、**
△**カゼヨク　ウケテ、**

紙鳶の歌

♩= 112





紙鳶の歌

一、紙鳶紙鳶揚れ。
風よくうけて、
雲まで揚れ、
天まで揚れ。

二、繪紙鳶に字紙鳶、
どちらも負けず
雲まで揚れ、
天まで揚れ。

三、あれあれ、下る。
ひけひけ、絲を。
あれあれ、揚る。
放すな、絲を。

○**クモマデ　アガレ、**
　テンマデ　アガレ。
△**クモマデ　アガレ、**
　テンマデ　アガレ。
○△第二・三聯も同じやうにして歌はせる。
○たこは　なにを　うけて　あがりますか。
△かぜを　うけて　あがります。
○どんな　たこが　あがってゐますか。
△ゐだこと　じだこが　あがってゐます。
○どちらが　たかく　あがってゐますか。
△ゐだこが　たかく　あがってゐます。
○さうです。じだこが　まけてゐますね。
　ゐだこが　かってゐますね。
　かぜが　なくなると　たこは　どうなりますか。
△さがります。（手眞似をしながら、指導者も和して）
○たこが　さがると　どうしますか。
△いとを　ひきます。（手眞似をしながら、指導者も和して）
○いとを　はなすと　たこは　どうなりますか。
△とぼくの　はうへ　とんでいきます。
（指導者も和して、一人々々に）
○第三十九頁の繪畫を見させて、
　たこが　いくつ　あがってゐますか。
△みっつ　あがってゐます。
○どの　たこが　たかく　あがってゐますか。
△どの　たこも　まけずに　たかく　あがってゐます。
○第四十頁の繪畫を見させて、
　これは　なんですか。

△ゐだこです。
○これは。
△じだこです。
○これは。
△やっこだこです。（指導者も和して、一人一人に）
○ゐだこは　どうしてゐますか。
△あがってゐます。
○じだこは。
△じだこも　あがってゐます。
○やっこだこは。
△さがってゐます。
○どうすると　あがりますか。
△いとを　ひくと　あがります。（指導者も和して）
○本を開かせ符號をたどらせながら、紙鳶の歌を歌ふ。（繰返して）
△符號をたどりながら一聯づつ歌ふ。（一人一人に）

3　總括

○をとこのこは　なにを　してゐますか。
（本の繪畫を見させて）
△たこを　あげてゐます。
○をんなのこは　なにを　してゐますか。
△はねを　ついてゐます。
○どんな　きものを　きてゐますか。（女の子の着物を指して）
△きれいな　きものを　きてゐます。
○いつごろでせうか。
△おしゃうぐわつです。
○むかふに　みえるのは　なんですか。
（紙鳶を指して）
△たこです。
○どんな　たこですか。

△ゐだこや　じだこです。
○みなさん、たこの　うたを　うたふ
　ことが　できますか。
△はい、できます。（一人々々に）
○では、いっしよに　うたひませう。

三　備　考

(一)　歌は、歌ふことを主として取扱ふべきはいふまでもないが、多少の理解を伴なつて歌はせるために、既習の「あれ」は代名詞としての「あれ」であり、本課で學習する「あれ」は感動詞としての「あれ」であることに留意し、「はなすな」の「な」は、禁止をあらはす助詞であることを、「飛ぶな」「走るな」など適當な用例を擧げて會得させ、「まけず」は、「かちます」「かちません」「まけます」「まけません」などから推定させ、「あがれ」は命令形であることを、「さがれ」「走れ」「取れ」「すわれ」などの例から會得させるといふやうにしたい。

(二)　中の卷第九課を復習することから入るのも一方法である。

第二十五課　（第四十一・四十二・四十三頁）

一　教　材

オキャクサマガ　イラッシャイマシタ。
ワタクシワ　オキャクサマオ　キャクマエ
オトーシシマシタ。
チチワ　オキャクサマト　イロイロ　ハナシオ　シテイマス。
「シバラクデシタ。ゴリョコー　ナサッタ　ソーデスネ。」
「ハイ、トーキョーエ　イッテキマシタ。」
「トーキョーノ　ヨースワ　ドーデスカ。」
「ドコエ　イッテモ　タイヘン　リッパデ
ニギヤカナノニワ　オドロキマシタ。」